SPECIAL STORY
TALES OF PHANTASIA
テイルズ オブ ファンタジア
琥珀の回廊
矢島さら
ファミ通文庫

矢島さら

Sara Yajima

1961年、横浜市生まれ。ジュニア小説、恋愛小説、エッセイなどを手がけるほか、麻宮笙の名で、ファンタジー小説でも活躍。また、かえるを心から愛してやまない「かえる友の会」会員として、精力的に活動中。主な著作に『あなたがそばにいるだけで』(福武文庫)他、多数。

松竹徳幸

Tokuyuki Matutake

アニメーション制作会社「プロダクションI・G」を通じて本編であるプレイステーション版「テイルズ オブ ファンタジア」OP・ED部分の作画監督を務めたフリーのアニメーター。おもに携わった作品に、「テイルズ オブ デスティニー」OPなどが上げられる。

カバーイラスト　松竹徳幸

テイルズ オブ ファンタジア

琥珀の回廊

矢島さら

TALES OF PHANTASIA®
琥珀の回廊

主な登場人物
クラース・F・レスター
王立学院（アカデミー）で魔法学を専攻し主席で卒業。魔術なみの召喚術を研究、会得。

エリー

ラリーとタキアの娘。兄のティミーとは異なり、礼儀正しく優しい少女。

ミラルド

王立学院を次席で卒業した才媛。クラースを公私両面から支える幼馴染。

ティミー

ラリーとタキアの息子。妹のエリーとは二卵性双生児。少し勝気な性格。

タキア・オーウェン

クラースたちの王立学院時代の後輩。学生結婚のため中退。旧姓マークス。

ラリー・オーウェン

タキアの夫。考古学者から転身し琥珀貿易商となる。謎の失踪をとげる。

スタンザ

ダオスの元部下。主（あるじ）の命を忠実に守り、時間の回廊を確保するために戦う。

テイルズ オブ ファンタジア

琥珀(こはく)の回廊(かいろう)

矢島さら

FB
Famitsu Bunko
ファミ通文庫

目次

ダオス城
白樺の森
ヴァルハラ平原
ミッドガルズ
12星座の塔
モーリア坑道
熱砂の洞窟
オリーブヴィレッジ

アセリア暦四二〇二年

浸食洞

ベネツィア

西の孤島

ハーメル

ローンヴァレイ

ユークリッド

アルヴァニスタ

精霊の洞窟

エドワード邸

ベルアダム

精霊の森

水鏡ユミルの森

プロローグ

さらさらと流れる水音に、男はハッと目を開けた。
(ここは――――!?)
あたりは暗く、ひんやりとしている。
洞窟だろうか。
どうやら気を失って倒れていたらしい。
男は弾(はず)みをつけて体を起こす。水音がするのにまったく濡(ぬ)れてはいない手足や首を動かしてみたが、別だんケガをしている様子もなかった。
だがそこはなにかの香りに満ちており、あまりの強烈さにくらりと目眩(めまい)をおぼえるほどだ。
「ううっ、なんなんだ、ここは」
(落ち着け……。落ち着いて思い出すんだ。私は確か今朝、家を出て、それから――――)

男は手のひらで鼻と口を押さえながら、必死で記憶の糸を手繰(たぐ)り寄せる。
(いつもの海岸近くの崖へ行った。そして――)

「!?」
突然、男は指の間から流れ込んでくる香りの正体に思い当たり、体を硬直させた。
「まさか……強すぎてかえって気づかなかったが、これは」
そのとき、前方がうっすらと明るむのが見えた。
「誰だ!? 誰かいるんだろう?」
「ふふふふ。やっと引き寄せた。お前を、待っていた」
「えっ」
男の目の前に、猛々(たけだけ)しいほどの樹木のうねりが映し出される。うねりの中からはっきりと聞こえてくる音に、彼はゾッとした。
(さっきから聞こえていた音は、水ではなくて樹液……?)
「お前を、待っていたのだよ」
再び低い声が男に向けられた。
と、ヒタヒタと足元に液体が満ち始める。男は叫んだ。

「おいっ、なんだこれは⁉」
「……苦しい……くるしい……あああああああああぁぁぁぁぁ〜っ」
「うっ、動かない。足が！」
「ああああああああぁぁぁぁ」
声の主が苦しみ出したが、男も他人にかまっている暇はなかった。足に根が生えたように、びくとも動かないのだ。
バシャッ!!
液体がどこかから飛んで来て、男の左胸——ちょうどポケットのあたり——を直撃した。液体はすぐに握り拳（こぶし）ほどの大きさに固まり、服に付着してしまう。
「くっ」
渾身（こんしん）の力をこめて固まりを剥（は）がす。
「もうやめろ！　いったいなんの真似だっ」
男はうめき声のする闇の中へ固まりを投げつけた。
それは声の主のもとへは辿（たど）り着かず、途中でフッと消失してしまったのだが、男の目には映らない。
「おお、この匂い……私は、もう……」

みるみるうちに上がってきた液体に腰まで浸かりながら、男は次第にまた気が遠くなってゆくのを感じていた。

第一章

「クラース！　クラース！」
ユークリッドの村の魔法修練所に、ミラルドの声が響き渡った。
「ねえ、ちゃんと考えてくれた？　アカデミーのセレモニーに出席するなら、そろそろ出発しないと。子供たちに留守の予定を伝える都合もあるんだから、早く決めて……あら」
クラース・F・レスターの部屋のドアを開けたミラルドは、ベッドに仰向けになっているクラースを見つけて、言葉を切った。
「まぁた、寝てるの？　もうお昼よ。召喚魔法の手ほどきを受けたいっていう人がさっきも来てたのに」
「……」
クラースは仏頂面（ぶっちょうづら）のまま、答えない。

ミラルドは濃い青(ブルー)の瞳で彼をしばらく見つめていたが、やがてほうっとため息をついた。

「ダオスを倒して戻ってから、あなたやっぱり変だわ。まあ、いいでしょう。でもね、きょうみたいないいお天気の日くらい、少しはお陽さまにあたったほうがいいんじゃないの」

「………だぞ」

「日陰にばっかりいるとただでさえ……え」

「誰か来たみたいだぞと言ってるんだ」

「ほんと？」

ミラルドは耳をそばだてた。

「がみがみがみがみ言ってるから、客の声も聞こえないんだ」

ミラルドは思わずムッとなったが、客が気になったのでそのまま踵(きびす)を返した。

彼女が行ってしまうと、クラースはゆっくりと視線を巡らせ、壁際の本棚の上に大切に置いてあるエターナルソード——時間(とき)の剣——に目をやった。

布で包んであるので、直接その刃の輝きを見ることはできなかったが、見つめているとクレス・アルベインの顔が浮かんでくる。

(あのとき……クレスは私に時間の剣の封印を頼むと言った。私は応えた――「責任を持って封印しよう」、と……)

アセリア暦四二〇二年の世界で時間の剣を封印することをクレスに約束し、アーチェ・クラインと別れてこの家に戻ってから、もう充分な時間がたっていた。

体の疲れもとうに癒え、気力も満ちている。

一日も早く約束を果たさねばという焦りが、クラースを不機嫌にさせているのだった。

(やはり、もう一度旅に出るしかないんだろうな)

また家を空けると告げたら、ミラルドはなんと言うだろう。

クラースは、そんなことを気にかけること自体、自分らしくないと思いながら寝返りを打つ。

体のあちこちにつけた鳴子が、シャラシャラと乾いた音をたてた。

「はーい、どなた？」

ミラルドが入り口のドアを内側から勢いよく開けると、人影がふたつ、ささっと飛びすさった。

「わっ」
「乱暴だなあ」
「ごめんなさい。つい力が入っちゃって」
ミラルドは苦笑しながら、訪ねてきたふたりの小さな客を見つめた。
男の子と女の子がひとりずつ。ふたりとも黒髪で、瞳が明るいグレーの瞳をしていた。七、八歳くらいだろうか。
ふたりとも近所の子供ではないようだった。見たことのない顔だったし、なにより着ているものがあか抜けている。
「何か用かしら」
「ミラルドさんだよね」
男の子が言う。
「ええ、そうよ」
「よかった。ひょっとしたら行き違いになってしまうんじゃないかと思って、急いで来たんです」
ベージュのリボンで黒髪をまとめた少女は、ほっとしたように微笑(ほほえ)んだ。チョコレート色のエプロンドレスが紅潮した頬(ほほ)によく似合っていて可愛らしい。

「あたしたち、お勉強を習いにきました」
お勉強、ね、ミラルドは複雑な表情でつぶやいた。
確かに彼女はここで村の子供たちに勉強を教えてはいるが、それは初歩の読み書きであって、〝お勉強〟などというものではないような気がしたからだ。もっとも、ミラルドにこの子たちを拒む理由などなかったのだが。
「あのね、きょうの授業は午後からなの。まだみんなが来るまでには時間があるわ。とにかくお入りなさいな」
ミラルドが促すと、少女が深々と頭をさげた。
「ありがとうございます。あたし、エリー・オーウェンです」
「僕はティミー。ティミー・オーウェン。ふたりとも七歳」
「あら、じゃあ双子ちゃんなのね」
ミラルドが思わず顔をほころばせると、ティミーと名乗った少年はチロッと彼女を見上げた。
「早計だな。年子っていう可能性もあるでしょ。双子だけどね。いちおう僕が兄だから、先生」
「……わかったわ」

（双子でも性格は正反対ってわけね。生意気なお兄ちゃんだこと）

ミラルドは双子の兄妹を教室に使っている大部屋ではなくダイニングに導くと、椅子をすすめた。

「ところで、おふたりさん。お父さんやお母さんは？」

「あのう、それが」

腰を降ろし、口を開きかけたエリーをティミーが遮る。

「授業料ならちゃんと払いますよ」

「お金の話をしているわけじゃないのよ。たとえ一ガルドも持っていなくたって、学びたいという子供を拒絶するようなことはしないわ」

眉をひそめたミラルドに、すみません、とエリーが謝った。

「あたしたち、アルヴァニスタから来たんです。母もすぐあとから、来ることになっています」

「そうなの。それじゃ子供ふたりでアルヴァニスタから？」

なんて親だろう、とミラルドはあきれた。

（それにしても、なぜわたしがここで子供たちを教えているって知っていたのかしら。宣伝しているわけでもないのに。わたしの名前もわかってたわよね）

「心配ないですよ。世界の脅威・ダオスは、勇者たちによって倒されたんでしょう？」
ミラルドの沈黙の意味を誤解したのか、ティミーが笑う。
「勇者ねぇ」
そうとも言えないのも混じってたみたいだけどね、とミラルドは密（ひそ）かに考え、それからふと思い出して訊（たず）ねた。
「ねえ、エリー。あなたさっき、わたしと行き違いになるかもって言ってたわよね。どういうこと？」
「ああ、それは母が。ミラルドさんとクラースさんはもうすぐ王立アカデミーの記念セレモニーに出席するために、アルヴァニスタに発つはずだからって」
「なんですって？　ちょっと待って……彼のことも知ってるってことは……ああ、わかりかけてきた」
ミラルドはこめかみに指を当てると、考え込んだ。
彼女とクラースは、かつてアルヴァニスタの王立学院で、共に魔法学を専攻していたのである。クラースが主席、ミラルドが次席で卒業したのちに故郷のユークリッドの村に戻ってきた。
そしてクラースは魔法修練所を設立し、あの日、クレスとミントが突然訪ねてくるま

では、魔法学を教えて生計をたてていたのだった。
母校のアカデミーから創立何十周年だかのセレモニーの招待状が届いたのは、半月ほど前のことだった。
もちろんミラルドはクラースと共に出かけたいと思っているのだが、かんじんのクラースが行くとも行かないとも決めてくれないので、未だにぐずぐずと準備もしないでいる。セレモニーはもう数日後に迫っているというのに、だ。
それで、ついさっきも文句を言ったのである。
(わたしたちふたりを知っていて、王立アカデミー内部のこともわかっているってことは……やっぱり同級生ってこと？)
ミラルドは散らばった破片を集めるように、事実をつなげてみた。が、同級生なら何十人もいるのである。具体的に誰なのかがわからない。
「オーウェン……オーウェンねえ。そんな友だちいたかしら」
あきらめかけたミラルドが顔を上げたとき、村の子供たちが隣室にどやどやと入ってくる気配がした。
「いけない、もう授業の時間だわ。話はあとね。ティミーもエリーもあっちの部屋で待っていてくれる？」

ミラルドはテキストを取りに行こうと立ち上がりかけ、「あ」と声を上げた。
「ふたりとも運が悪いわね。きょうは試験だってこと、忘れてたわ。書き取りと作文なんだけど、どうする？　なんだったら見学していてもかまわないけど」
エリーは急に不安そうな表情になり、兄の横顔に視線を当てる。
が、べつに、とティミーは言った。
「だいじょうぶだよ。こんな田舎のテストくらいどうってことないさ」
「あらそう」
ミラルドは鼻白むと、そのままダイニングから出ていった。

「おい、ミラルド」
クラースが教室に顔を出したのは、もうすぐ陽も暮れようという時刻だった。とうに授業は終わり、生徒たちはそれぞれの家で夕食の手伝いでもしているころだ。
「ミラルド」
西の窓を染める夕焼けの中で、だがミラルドは彼に気づく様子もなく、ひとり黙々とペンを使っている。そして突然、素っ頓狂な声を上げた。

「うそっ!?　全問正解だわ」
クラースがわざとらしい咳払(せきばら)いをすると、彼女ははじめて振り返った。
「ねえ、見てのとおり試験の採点でいま忙しいのよ。なにか用かしら」
「用かしら?」
クラースは、凭(もた)れかかっていた柱を拳で軽く叩いた。
「アカデミーに行くか行かないか、急いで決めろと言ったのはおまえじゃないか。ひとがせっかくその気になったたっていうのに」
「ほんとう?」
ミラルドは思わずにっこりした。
「ああ。道中、いろいろ話したいこともあるし……」
封印のための旅のこととかな、と彼は心の中で続ける。
「なによ、改まって話だなんて。さてはつらい長旅の果てに、正式に結婚でもしたくなった?」
「ばっ、ばかいえ」
クラースは即座に否定してみせ、
「それよりどうしたんだ?　ダイニングにいる子供たち。見かけない顔だが新入りか」

と訊ねた。
「そうなのよ。それがね……あなた、オーウェンって名前に心当たりある？」
ミラルドは昼に訪ねてきたティミーとエリーの話をした。クラースは黙って聞いていたが、
「そんな名は記憶にないな。同級生って決まったわけじゃないんだろう」
「そうなんだけど……それにしても、見てよこれ」
ミラルドはふたり分の答案用紙をクラースに差し出す。
「きょうね、たまたま試験だったの。それで、男の子のほうが自信満々だったから、ちょっと出来心であのふたりには特別むずかしい書き取り問題をやらせてみたんだけど、なんとふたりとも全問正解。作文も、とても七歳の筆とは思えない完成度なのよ。作文というよりは、立派な論文。まいったわ」
「……ティミー・オーウェン、『天候と商品価格の相関性と変動』。エリー・オーウェン、『シュレール紀における地層区分と化石』。なんだこりゃ、マジか!?」
「まあ、たどたどしい部分もないじゃないんだけど。制限時間内にこれだけ書いちゃうんだから天才かもよ、あの双子ちゃん」
「気色悪いね」

クラースは呆れて答案用紙を机の上にバサッと投げ出した。
「夕方には母親がここに来るっていうから、待たせてるんだけどね。そんなことより」
ミラルドは「ふふっ」と笑うと立ち上がった。
「久しぶりだわ、アカデミーのみんなに会うのは。ねえ、いったい何年ぶり？　どの服を着て行こうかしら。そうそう、塾を休むって貼り紙もこしらえなきゃ」
ああ忙しい、と言いながら、ミラルドは教室を出て行く。
（よほどうれしいんだな）
クラースも我知らず唇をほころばせかけたが、そのとき人の気配を感じてハッと顔をあげた。
窓の外、逆光の中に誰か立っている。
「あのう、すみません」
女の声だった。
「誰だ」
「子供たちがここに――――」
女の姿がフッと消え、地面に倒れる音がした。

「ほんとうにもうだいじょうぶですから……」
クラースの肩を借りてダイニングに入ってきた女性を見るなり、ティミーが叫んだ。
「母さんっ！」
「どうしたの？　服が汚れているわ」
エリーが駆け寄り、スカートをはたいてやる。
「どうしたのクラース」
物音を聞きつけたミラルドが奥から出てきた。
「まあ、お待ちかねのお母さんの到着ね――――えっ!?」
ミラルドの瞳が大きく見開かれる。
濡れたようにつやのある黒髪。大きく、潤(うる)みがちな瞳――。
深い深い記憶の森から、たった一輪の花を摘みとったような思いがした。
「あなたは……確か……タキ……タキア・マークス……」
ええ、と女性は微笑んだ。
「そうよ、ミラルド。あれから一〇年もたっているのに、覚えていてくれたなんてうれ

しいわ。でもいまはタキア・オーウェンなの」
「思い出したぞ！」
クラースがぱちんと指を鳴らす。
「アカデミーに入学早々、若き考古学者と駆け落ち結婚したタキアだ！　それで除籍になったんだったな」
「駆け落ちって……ちょっとクラース。子供の前よ」
ミラルドが鋭く制したが、なにがおかしいのかティミーがけらけらと笑う。
「いいんだよ。僕たちはぜんぶ聞かされてる。駆け落ちして……父さんと母さんが愛し合って、僕と妹が生まれたんだ。意味わかる？　先生」
「わかりますともっ」
ミラルドは頬をうっすら赤らめ、大真面目に頷(うなず)いてみせた。
「それと、クラースさん」
エリーも口を開く。
「父は除籍にはならず、あたしたちが生まれてすぐ教授になりました。考古学と動物学、それから博物学の博士号を持っています。もっとももう王立アカデミーは辞めてしまったんですけど」

「ちょっと聞きたいんだが、その博学のオーウェン教授はエルフなのか？」
「いいえ、父は人間です。人間だって頑張って勉強すれば、エルフの博識に匹敵するくらいの知識は得られると……」
「ふむ」
人間の子供なのにこんなに優秀なのか、とクラースはあらためて舌を巻く思いだった。
当時アカデミーの魔法学専攻にはエルフやハーフエルフの客員教授が数多くいたので、もしかしたらと思ったのだ。
「ああ疲れた。日暮れまでに辿り着こうと必死で急いできたの」
タキアは椅子にぺたんと腰かけると、持っていた小さな布製のバッグをテーブルに置き、疲労の滲んだ顔を両手で包んだ。
「いったいどうしたっていうの」
ミラルドはタキアの横に座って、そっと肩を抱いた。
「アルヴァニスタから移ってきたの？」
「いいえ。家はそのままよ。いずれ戻るんですもの」

タキアは顔を上げた。

「留守の間のことをあれこれしておかなくちゃならなかったから、先に子供たちを出発させたんだけど、驚かせちゃってごめんなさい。成績優秀だったあなたたちの噂(うわさ)はいろいろ聞いていたわ」

「……そう」

「ちょうど、もうすぐアカデミーでセレモニーがあるのよね？　さすがに私に招待状は来なかったけど、夫には報せがあったわ。アルヴァニスタで待っていても会えるんじゃないかと思ったんだけど、じっとしていられなくて……行き違い覚悟でここまで来てしまった――」

「なにか困ったことでも？」

ミラルドが質問したとたん、子供たちがなぜかさっと目を伏せるのを、クラースは見た。

「ええ、ミラルド。実はね」

ぐらりとタキアの上体が傾いた。

「しっかりして。ずいぶん疲れているようね。ひと晩眠ってからのほうがいいんじゃないの？」

あわてて体を支えてくれたミラルドに、タキアはつらそうに頷く。
「……そうね。そうさせてもらっていい？」
「もちろんだわ」
ミラルドは双子に向かって、
「先にお母さんを寝かせてから夕食にするけど、いいわよね」
と言った。
「この人ったらじゃがいもの皮も剝けないんですもの。ねえクラース」
「うるさい」
ティミーとエリーは顔を見合わせ、くすっと笑った。
「どこのお父さんもおんなじだね」
「わ、私はお父さんではないぞっ」
「なにをムキになってるの？」
ミラルドが笑った。

深夜。

クラースの部屋のドアが細く開いた。
「もう寝ちゃった？」
ミラルドだった。
「三人ともよく眠ってるわ。よっぽど疲れてたのね」
「おい、ここで寝るつもりか」
ベッドサイドのランプの灯りで本を読んでいたクラースは、体を起こすと非難めいた口調で言った。
「なによぅ。わたしの部屋はベッドもソファもあの三人に占領されちゃってるの。他に寝る場所なんかないじゃないの」
「それはそうだが」
クラースは不自然なほど壁際に寄り、ミラルドのためにスペースを開けてやる。
まだ本を読むつもりだったので背もたれには寄りかかったままだ。
「あーあ。出かけるの、ひょっとしたらダメになっちゃうかもね」
ごそごそとベッドに潜り込んだミラルドは腹ばいになりながら、ため息をついた。
「話を聞いてみないことにはわからないじゃないか」
「久しぶりにアルヴァニスタ城なんかも見たかったのになあ。それに、あなたたちが助

けたっていうハンサムなレアード王子にも会ってみたいし……」
クラースは、いまやミラルドの頭の中には自分が経験した冒険がそっくりそのまま入っているのだな、と苦笑した。
せがまれるまま、何度も話して聞かせたのだ。
「それにしても、よくタキアの顔と名前を覚えていたものだな。机を並べていたのは、ほんの短い期間だったろう？」
クラースがさりげなく話題を変えると、「そりゃそうよ」とミラルドは彼のほうに体を向けた。
「だって当時のタキア、すごく綺麗だったじゃない」
「そうか？」
「いまでも綺麗だけど、あのころはみずみずしい果物みたいな感じの娘だった。とても魔法なんかに縁がなさそうだったわ。案の定、すぐに見初められちゃったわけでしょう。けど、正直言ってタキアが除籍になったって聞いたとき、わたしはほっとしたの」
なぜだかわかる？　と薄闇の中でミラルドは訊ねた。
「いや、ぜんぜん」
「あなたが彼女を好きになっちゃうんじゃないかって、思ったりしていたから」

「はあ?」
クラースは、持っていた本を取り落としそうになった。
「彼女、決して計算ずくじゃないとは思うんだけど、なんていうのかしら。ちょっとトロトロしていて、危なっかしい感じがあったじゃない。男性を、僕が手をさしのべてあげなくちゃっていう気分にさせるような」
「おまえ、なにを言ってるんだよ」
「だから、そう思ったんだってば。昔の話よ。それで忘れていなかったのかもね」
クラースはゆっくり手を伸ばして、ミラルドの髪を撫(な)でた。
昼間は結っているが、ほどいて下ろすと深い青(ブルー)が波うつ海を思わせる。
彼はこの髪がとても好きだった。決して口には出さないが。
「そういう話を聞くと、おまえも女だったんだなって再認識するな」
「失礼ね」
ミラルドはクラースの手を払いのける。
「わたしたちだってここに戻ってすぐ結婚していたら、いまごろは……」
「いまごろは?」
「……なんでもない」

ミラルドは自分にあの双子くらいの子供がいる状況を想像してみたが、うまくいかなかった。

「それより白状したらどうなの？」

「え」

クラースはギクッとなった。

「なにかわたしに言わなくちゃいけないことがあるんでしょう。ここのところずっと悩んでるみたいだし」

「いや、それは」

「もしかしてあの剣のことかしら……。するんでしょ、封印」

ミラルドは包まっているシーツの中から腕を伸ばし、本棚の上を指さした。

「封印の仕方がわからないとか？」

「まさか。精製と逆の過程をたどればいいんだ。まあ実際にはオリジンに頼んで、ということになるが」

「『氷の剣』、『炎の剣』、それとダイヤモンドの指輪ね」

「そのとおり」

「えっ!?　ちょっと待ってよ」

ミラルドはあわてて起き上がった。
「クラース。まさかそれぞれバラバラに、元あった場所まで行って封印するんじゃあ」
「そのとおり」
クラースは無表情に頷いた。
「冗談じゃないわ。また旅に出るのねっ⁉」
「仕方ないだろう。私はクレスと男と男の約束をしたんだからな」
「……」
ミラルドはキッと上目遣いでクラースを睨んだ。
「あなた、ここに帰ってきたとき、わたしになんて言ったか覚えている？」
「……さ、さあ」
クラースはたじろいだ。
「〝神に土下座されても、もうどこへも行くもんか〟って言ったのよ」
「それはだな、あのときの偽らざる気持ちだったんだ」
「どうしてもっていうなら、わたしもいっしょに行くわ」
「おいおい。どんな危険が待っているか、わからないんだぞ」
クラースは正直、ミラルドを少々持て余しはじめていた。

「だってもうダオスは倒されてしまったんでしょう？　だったら」
「残党がいないとは言い切れない！　いいか、ミラルド。命がけで守ったこの世界で、私はおまえをどんなちっぽけな危険にも晒したくないんだ」
「…………」
「今夜はちょっとおかしいぞ」
「…………」
強い語気に押されるようにミラルドは黙り込み、壁際のクラースを見つめた。
ランプの炎が揺れる。
壁に映ったクラースの影がゆらりと動いたとき、ミラルドはふうっと息を吐いた。
「……ほんとね。今夜のわたし、どうかしてるみたい。ごめんなさいね」
「いや。もう寝るといい。私はもう少しこれを読んでいるから」
「おやすみなさい」
ミラルドはクラースに背を向け、ふたたびシーツに潜り込む。
だが、目は冴えてしまっている。
（わかってる……わたしがイライラしている理由……わたしはタキアの幸せぶりに嫉妬しているんだわ）

話はまだ聞いていないものの、困り果てている様子の人間に嫉妬するなど、いつもの自分の性格からは考えられないことだ。
(クラースにこんな弱みを見せるなんて、わたし……)
と、こめかみに暖かいものが広がる——。
ミラルドは、自分が涙を流していることに気づいて愕然（がくぜん）とした。

翌朝、いちばん遅くまで寝ていたのはタキアだった。
「おはよう。いい匂いね」
ほつれた髪を撫でつけながら現れたタキアは、さすがに照れくさそうに、テーブルの上の皿をちょっと触って笑った。
「よく眠れたみたいじゃない。朝食はエリーが作ってくれたのよ。手際がよくって、感心したわ」
ミラルドは、すでにテーブルについている少女の頭を撫でてやる。
「うちの子はふたりとも夫に似たみたいなの」
タキアはまんざらでもなさそうに言うと、空いていた席についた。

ティミーは、隣りに座っているクラースの顔や腕の刺青(いれずみ)をしきりに観察していたが、
「ねえ、それはなんの色素なの？　定着させるとき痛かった？」
などと訊ねて、クラースの眉をしかめさせた。
「さあさあ、早く食べてしまって。食事がすんだら子供たちはジョリーの家に行くのよ。もう話はしてあるの」
ミラルドは、タキアに、
「わたしの生徒の家だから心配ないわ」
と説明した。
子供の耳があっては話しづらいこともあるだろうという、彼女の思いやりだった。

食事が終わった頃ちょうど迎えにきたジョリー――一〇歳になる少女で、ミラルドの教え子のなかではもっともよくできる生徒のひとり――といっしょに双子が行ってしまうと、三人はリビングに移動した。
「さあ、聞こうじゃないの。といっても、だいたいの察しはついてるけどね」
「えっ」

タキアは驚いてミラルドの顔を見た。
「……オーウェン教授……ご主人のことでしょう？」
　ええ、とタキアは頷き、
「でもいまは教授じゃないの。商人に転向したのよ」
「商人!?　そりゃまたなんで」
　クラースが目を見張った。
「かいつまんで言うとね、つまり、まずティミーが喘息（ぜんそく）だったの。生まれつきのね。それが治ってしまったから、琥珀（こはく）商になったというわけ」
「かーっ、わからん！　かいつまみすぎなんだよ。よくそんなんでアカデミーの入学試験に通ったな」
「クラースったら」
　ミラルドはクラースを軽く睨み、辛抱強くタキアの話を聞き始めた。
　それによるといまから三年前、タキアの夫であるラリー・オーウェンがアルヴァニスタ港の北側を散歩していた際、海岸で琥珀を拾ったことがすべての始まりであるらしかった。
「葡萄（ぶどう）の実くらいの大きさでね、木の葉の一部が入ったとてもきれいな琥珀だったわ。

葉脈がそのまま残っていて。ラリーは、琥珀にはいろいろな力があるんだと言って、当時喘息の発作のひどかったティミーのベッドの枕元に置いたの。そしたら、数日のうちにウソみたいに咳が止まってしまったの」
「まあ。本当に？　琥珀って松の樹液が固まってできるという石でしょ」
「正しくは、針葉樹の樹脂、だ」
　クラースが訂正する。
「ラリーが琥珀にとり憑かれたのはそれからよ。学者として研究するだけでなく、ティミーと同じように病気で苦しんでいる人のために、琥珀を世界に流通させたいと言い出して……あっさり教授の椅子を放り出し、アカデミーを辞めてしまった。彼は私と結婚したときには一時的にアカデミーを離れていたけれど、戻ってからはずいぶん厚待遇を受けていたのに」
「それは気の毒に」
　とクラースは皮肉った。
「じゃあ、ご主人はしょっちゅう旅に？」
　ミラルドが訊ねる。
「いいえ。琥珀はいつも、近場で採るの。たいてい近くの海岸でね。採れたものは都の

市で売ってしまうわ。めったに出ないけれど、鳥の羽根や昆虫が入っているものは高値がつくの」
「そう。なんだか話を聞いていると、別に問題なんてなさそうねえ。いったい何を悩んでいるわけ？　まさかご主人、浮気でも」
タキアはきっぱりと首を振り、
「そんなんじゃないと思うわ。ただ、もう一カ月も帰ってこないの」
と、ため息をついた。
「は？」
ミラルドは思わず聞き返した。
「だから、家に帰ってこないんだってば」
「ちょっとタキア！　それってまさか失踪したっていうこと？　行方不明になったの？」
「琥珀の採取に遠出したんじゃないのかね」
クラースは興味なさそうにつぶやいた。
「あっちでいいのが出たと噂を聞いて、ふらふら行ってしまったとか。凝り性の人間にはよくあることなんじゃないか？」

「冷たいわね」
ミラルドは言い、タキアに向き直る。
「それなら手紙の一通でも来るんじゃない？　連絡は？」
「あったら私だってこんなに心配しやしないわ――ああ、そうだ」
タキアは膝の上に置いていた布製のバッグをごそごそとまさぐった。
「手紙じゃないんだけど、おかしなことがあったのよ。これを見て」
彼女がバッグから取り出したのは、柔らかな布にくるまれた一個の琥珀だった。
拳ほどもあるだろうか。かなりの大きさだ。
「ラリーがいなくなって三日目くらいだったかしら。彼の書斎へ入ってみたら、机の上にこれがあったの」
「立派な琥珀ねぇ。でも、お宅には琥珀がたくさんあるんでしょう？　だったら別に」
「ううん。ラリーはふだん机の上にはなにも置かない主義なんですもの」
「ふうん……」
首を傾げるミラルドの横から、ずっしりと持ち重りのする琥珀を手に取ったクラースは思わず声を上げた。
「こ、これは……!?」

「なあに。まあ、きれいね。変わった虫が入ってるわ」
琥珀を窓に向け、光に透かし見たミラルドは目を細める。とたんにクラースが吐き捨てるように言った。
「なに言ってるんだ、よく見てみろよ。金属製の虫がどこにいる」
「えっ⁉　ああ、ほんと。なにこれ……もしかしてペン先？」
それは細かな気泡に囲まれ、確かにペン先の形を成していた。琥珀の色が重なっていて少し見づらかったが、軸に差し込む部分が折れてしまっているようだ。
「ほら、先へいくにしたがって急激に細くなっているでしょう。ラリーは細かい字を書く人でね、そのペン先は特注品なの」
「どういうこと？　たしか琥珀って……」
ミラルドはようやく事の重大さに気づいて、クラースに視線を当てた。
「さあな。タキア、これがラリーのものだという証拠はあるのか」
「間違いっこないわ！　以前使っていたペンがダメになってしまって……これは私が自分で注文して、先月の結婚記念日に贈ったものなんだから。それに最後に出て行った日の朝、いつものように胸に挿してたのを見たもの！」
タキアは興奮してテーブルを叩いた。

「まあ待て。ちょっと整理してみよう」
クラースは言い、自分の部屋から分厚い本を取ってきた。
「ラリー・オーウェンがいなくなったのが一か月前。その三日後に、突然ペン先の入った琥珀が現れた、と。しかしだなぁ――琥珀、琥珀、と。ああ、あったあった」
クラースは本を繰(く)り、目的のページを見つけると、タキアとミラルドに示した。
「やっぱりそうだよなあ。琥珀はただ樹脂が固まればいいというわけじゃない。何千万年か、ときにはそれ以上、一億年もの年月を眠りつづけて完成される化石の芸術なんだ」
「何千万年……そんなバカな」
ミラルドは呆然(ぼうぜん)としてペン先入りの琥珀を見つめた。
「これはまだ半生(はんなま)ってことは、ないわよね」
「立派な琥珀よ。琥珀商の妻として言うけど」
タキアは断言し、それから急に肩を落として続けた。
「これが私の話――。信じてもらえたかしら」
「ええ、いちおうはね。でもタキア、ひとこと言ってもいい?」
「どうぞ」
ミラルドは、すーっと息を吸い込むと怒鳴った。

「バカっ！　こんな大変なこと、どうして昨日すぐに言わないのよっ！　あんたってば昔とぜんぜん変わってない！」
「……うっ。だってミラルドが寝たほうがいいって言うから……」
　タキアがさめざめと泣き出す。
　ミラルドはぷりぷりしながら台所へ立った。

「おい。泣いている女とふたりきりにするなよ」
　背後から声をかけられ、湯をわかしていたミラルドは振り返った。
「だって、あんまりトロくて腹がたっちゃったんだもの」
「私もああいうタイプは苦手だな。いまも、アカデミー時代もだ。私が彼女に魅(ひ)かれるかもしれないだなんて、よく考えたものだ」
　と、クラースは顔をしかめる。
「確かに。若気の至りだったわね」
　ミラルドは微笑んだ。
「……それにしても、彼女のご主人……ラリーはどうしてしまったのかしら」

「タキアの話がすべて正しいとして……疑問点は三つ、か」
クラースが宙を睨みながら考える。
「なぜたった三日で琥珀ができてしまったのか。なぜ琥珀が書斎に現れたのか。なぜラリー・オーウェンは帰ってこないのか」
「最後の疑問は解けるかもしれない」
ミラルドはクラースをじっと見つめた。
「樹脂にペン先が入ったとき、ラリーもそこにいた可能性はあるでしょう？　だとしたら、理由はわからないけど、彼は大昔の世界に行ってしまったのかも。ほかの疑問とはぜんぜんつながらないけどね……。ねえクラース、笑わないで聞いて」
「ああ、笑わんよ」
「あの時間の剣を使って、何千万年か時を遡ってみるというのは？」
「はっはっはっはっはっ」
クラースは大笑いした。
「とんでもない！　あれは私の一存で使えるものじゃない。それにもうすぐ封印するんだ。だいいち、はっきりした年号もわからないじゃないか」
ミラルドは肩をすくめた。

「言ってみただけだわ。わたしだってどうせならクレス・アルベインのいる時代に行って、もう一度あの子たちに会いたいしね」
「どちらにしても、本格的に調べるならラリーが消えた場所……アルヴァニスタに行かないとな」
「もちろんよ！　わたしたちを頼って訪ねてきたのよ。話を聞いた以上、タキアにできるだけのことをしてあげなくちゃ」
「えらい張り切りようだな。言っておくが、セレモニーには出られないと思ったほうがいいぞ」
わかってるわよ、とミラルドは唇を尖らせる。
「でも念のためにドレスを持っていってもいいでしょう？」
「ご自由に。案外ラリーがひょっこり戻ってきているかもしれないしな」
クラースは笑い、踵を返した。とたんに表情が険しくなる。
(私の考え過ぎでなければいいが……。時間の流れが歪んでいるのだとしたら、あいつのせいだ。この期に及んで、まだあいつに振り回されなければならないというのか!?)

第二章

その夜。
クラースは不機嫌をまる出しにした顔で、窓際に座っていた。
「まったく、なんで私が自分の部屋を追い出されなければならないんだ」
「しょうがないでしょう？　ティミーがもう私の部屋は飽きたっていうんですもの」
「何様のつもりだあのガキはっ!?　ここは宿屋じゃないんだぞ」
「まあいいじゃないの」
くすくす笑うミラルドは、明日の朝持って行く荷物をまとめるのに余念がない。
「よくないさ。息子がそんなわがままを言ったら諭（さと）してやるのが母親じゃないか。それをタキアは……あらいいわねえ、私もクラースの部屋で寝るわぁ、だと」
早朝出発に備え、早目にベッドに入ろうとしていた矢先にティミーに乱入され、クラースはついいましがた、ミラルドの部屋へ移ってきたのだった。

「ねえ、この青い服とこれだったら、どっちがいい?」
ミラルドが二着の服を胸に当て、無邪気(むじゃき)に訊ねた。運良くセレモニーに出席できたら着るつもりのものだ。
「ん? ……どっちでも一緒じゃないのか」
「なによぉー、その言い方は」
ミラルドの語気にクラースはハッとし、
「い、いや、すまん……そういう意味じゃないって」
と口ごもる。
「そういう意味ってどういう意味?」
「だから、つまりだな。私はもっと大変なことを考えていて、おまえの服のことまで気が回らないということだ」
「うまいこと言っちゃって。いいわよ、着るものくらい自分で決めるから」
ミラルドはさっさと青いほうの服をたたみはじめた。
クラースはその様子をじっと見ていたが、ふと目の前のテーブルにトランプが置いてあるのに気づき、手に取った。
「ミラルド。ちょっと聞いてくれ」

「なあに」
「ほら、切ってみるぞ」
クラースはゲームを始めるときのように、細い指でパラパラとカードを混ぜてみせる。
「この一枚一枚がある特定の時間を表すとしよう――これが現在」
クラースは束の中ほどの一枚をちょっと持ち上げ、それからそのカードの前後から適当にまた一枚ずつ持ち上げる。
「こっちは過去と、未来だ。時間の流れは本来こうやってきちんと順番に、パラパラとめくられてゆくのさ。ただし、そのためにはカードがきちんと揃(そろ)えられていなければならない」
「なにが言いたいの」
ミラルドは荷物をそのままにして、窓際にやってきた。
「つまり、ラリーの時間はこう……縦横斜めが、めちゃくちゃになったんじゃないかと思うんだ」
クラースはトランプをテーブルの上で乱雑に混ぜ、そのままひと固まりにする。
「なるほどね。これじゃめくろうと思っても止まってしまったり、おだんごになって何枚も飛ばしてしまうことになるわね」

ミラルドは飲み込みよく頷いてみせ、
「でも、なんで時間がこんなことになっちゃうわけ?」
と首を傾げた。
「ダオスさ」
「えっ」
カードを突ついていたミラルドの指がビクッと止まる。
「ダオスひとりじゃない。あいつと、あいつが率いていたモンスターどもは何度も無茶なやり方で時間を旅していたんだ。堅牢な壁をぶち破るようにね。どこかに歪みや亀裂が生じていたとしてもおかしくないかもしれない。推測に過ぎんがね」
「…………」
「たとえば、あのペン先が入った琥珀のまわりで時間が異常に速く流れたりしたら、どうだろう」
うーん、とミラルドは腕組みした。
「お話としては面白いけどねえ。そんなことが現実にあるとは……」
「私も仮説として考えてみただけだ」
クラースが自嘲(じちょう)的な笑みを漏(も)らしたとき、部屋のドアが遠慮がちにノックされた。

細く開いた隙間（すきま）から、中を覗（のぞ）き込んだのはエリーだった。
「あら、どうかした？」
「すみません。ちょっと来ていただけませんか。兄が、止めても聞かなくて」
「ひとの部屋でなにをやらかしてるんだ？」
クラースがせきこんで訊ねた。
「クラースさんの剣を――」
「しまったっ‼」
エリーの言葉が終わらないうちに、クラースは部屋を飛び出して行った。
時間の剣ね、とミラルドにもピンときた。
「タキアはどうしたのよ」
「眠っています。母はとても寝つきがいいんです」
クラースの意味不明な怒鳴り声が廊下に響き渡った。
「やれやれ」
ミラルドはエリーの肩を抱き、
「あなたはこっちで先に休んだほうがよさそうよ」
と苦笑する。

少女は素直に頷いた。

廊下を走り、自分の部屋へ駆け込んだクラースは、一瞬ぎょっとなって立ち尽くした。

「へへへっ、やあっ！　とおおっ、と」

ランプが明るく灯る部屋の真ん中で、ティミーが両手で重い剣を振りかざして得意満面に笑っていたのだ。

「おわああああっ！」

クラースは自分でも驚くくらいの大声で喚いていた。

「あれ。なにをそんなにあわててるんです」

ティミーは、きょとんとして剣を持った腕をだらんと降ろした。

身長が充分でないのと剣が重いのとで、切っ先が勢いよく床を擦る。

「うわっ！　はは、は、離せ離せっ、それに触るなっ！」

「だってそこに放ってあったから……」

「置いておいたんだ！」

クラースはティミーの手から時間の剣をもぎ取り、肩で息をした。

「もう、クラースさんたら大げさだなあ。ちょっと借りただけじゃないか。そんなに大切な剣なの？」
「あたりまえだっ。これはなあ、世界に一本しかないエターナルソードなんだぞ！」
「なにそれ」
ティミーが鼻で笑った。
クラースはカッとなり、
「時間を超えることができる時間の剣だよ。間もなく封印するんだからおまえのような子供におもちゃにされては……」
ふいに、クラースは口をつぐんだ。
（しまった。喋りすぎたか……？）
「ふううん」
ティミーの瞳がキラキラと輝いて、クラースを上目遣いに見た。
「その話、くわしく聞かせてよ」
「断る」
「さわりだけってのは？」
「断るっ」

「あっ、そう」
ティミーはにやりと笑う。
「じゃあいいや。母さんを起こして、いまクラースさんが母さんにとってもいやらしいことしようとしてたよって言ってやる」
「バっ、バカなっ！」
クラースは真っ赤になってベッドに視線を投げた。
幸か不幸かタキアはよく眠っており、騒ぎにも目を覚ます気配はない。
「ふっふっふ。人妻に横恋慕（よこれんぼ）……彼女になんて言いわけするつもりかなあ」
「悪魔か、おまえはっ」
クラースはダンっと床を踏み鳴らした。

「そろそろアルヴァニスタに入るわよ」
タキアがあたりの風景を見渡して、ほっとしたように告げる。
ユークリッドの村を出てから数日目に、一行はそれぞれにとって思い出のある都の土

を踏むことになった。
「懐かしいわあ。建物が増えてずいぶん変わってしまってるけど、見てよこの人の多さ！　ええっと、お城があそこだからアカデミーはその先ね」
ミラルドがはしゃいだ声を上げたが、クラースに一蹴される。彼は布にしっかりとくるんだ時間の剣を肌身離さず持ってきていた。
「ラリーが消えた場所が先だ」
「……わかってるわよ」
つまらなさそうな物言いに、タキアが振り向いた。
「ごめんなさいね。私たちの家はちょうど海岸へ行く途中だから、ちょっと寄って休憩していってね」
助かるわ、とミラルドは無理に笑みを浮かべてみせる。

オーウェン家は高台に建つ屋敷だった。
細ぼそと琥珀だけを売る商人の家とはとても思えない、贅沢(ぜいたく)な造りだ。
タキアが自慢げに話していたように、アカデミーでのラリーの待遇は相当よかったに

違いない。

「さあどうぞ。いまお茶をいれますからね。ほらほら、ティミーは自分のお部屋の窓を開けていらっしゃい。エリー、廊下もお願いね」

家に一歩入るなり、タキアは別人のように次々と指示を出し、くるくるよく動いてクラースとミラルドを驚かせた。

「水を得た魚って感じね」

「主婦が性に合っているんだろ」

ふたりは小声で言葉をかわす。

と、奥からティミーがワゴンを押しながら戻ってきた。食事を供するときに使うものらしかった。

「クラース、ここに時間の剣を置くといいよ」

「……うむ、すまんな」

クラースは細長い布の包みを言われるままにワゴンの上に乗せる。

「ふうん。てっきりウマが合わないのかと思っていたけど、あなたたちって仲いいんじゃない」

ミラルドに笑われ、ギクリとしたクラースは唇をひくつかせたが、なにも言わなかっ

た。
かわりにティミーが、
「だって、僕は物質の融合についてもとても興味を持っているんだ。仲がいいっていうのもあながち間違いじゃないけどね」
と意味ありげな説明をした。
二階からエリーが窓を開けている音が聞こえてくる。かなりの数の窓を全部ひとりで開け放っているらしい。
「わたしもなにかお手伝いしなくちゃ」
ミラルドがそう言いながらタキアのいる台所のほうへ行ってしまうと、
「ねえクラース、来て」
ティミーが声をひそめた。
「ん？」
「父さんの書斎。見たくない？」
少年は、ズボンのポケットから鍵束（かぎたば）を覗かせて目配せした。
「母さんのドレッサーの引出しからとってきた。僕たちもめったに入れてもらえないんだよ」

「そうだな。念のために見ておこうか」

なにもこそこそする必要はないのだがと考えながらも、クラースはティミーの後について広々としたリビングを横切り、階段を昇る。踊り場のところで、降りてきたエリーと擦れ違った。

「窓、全部開けたか？」

「ええ」

「じゃあ母さんを手伝ってやれよ」

「わかったわ」

兄の言葉に頷き、トントンと降りて行く少女を見やり、クラースは眉をひそめた。

「おい。もうちょっと優しく言えないのかね。双子なんだろ」

「双子っていっても二卵性だもん」

ティミーはそう言い捨て、階段を昇りきると重厚なドアの前に立った。そっと鍵を開ける。

（べつだん変わった様子もなさそうだな）

クラースは薄暗い部屋に入り、内部を用心深く見回した。施錠（せじょう）されていたので、エリーも窓を開けなかったらしい。きちんと閉められた薄手のカーテンからは埃（ほこり）の匂いがし

た。
　本棚にはラリーの学問の専門書と琥珀がいくつか並んでおり、大きな机の上にはなにも置かれていなかった。
　ティミーは窓を背にして立ち、机の上をゆっくりと撫で回した。
「留守をしていた間に、またなにかここに現れてたらいいなと思ってたのに……」
「そうだな」
「ひょっとして、父さんはもう……」
　逆光のなか、ティミーの瞳から大粒の涙が転がり落ちるのをクラースは見た。
「心配だよな。おまえはうちに来たときから気丈だったから、こっちもついそのつもりでいたが……」
　けっ、とティミーは顔をあげ、
「女の前で泣けるかよ」
　と宙を睨んだ。やがてその視線は目の前の男を捉（とら）える。
「クラースは母さんのこと、バカだと思ってるんだろ」
「え……そんなことはない」
　突然なにを言い出したのかと、クラースは驚いた。

「思ってってもいいよ。でも僕はふだんの母さんを知ってる。父さんがいなくなって――いまはあれでも精一杯明るくふるまってるんだ。僕は――見ていて胸が痛いよ」

ふたたびぽたぽたと涙を落とし始めた少年をどう慰めればいいのか、クラースには見当がつきかねた。

が、すぐに彼は自分で涙を拭き、

「先に降りていて。僕は鍵を戻してから行くから」

と言った。

日没までにはまだ間があったので、一行は軽食をとってからさっそく海岸へ行ってみることにした。

アルヴァニスタ港を右手に見ながら、さらに北へのルートをたどる。

「ねえねえ、港よっ」

「見ればわかる」

ミラルドは並んで歩いていたクラースの脇腹をつねった。

「いてっ。なにを……」

「懐かしくないの？　この海のきらめき、船。ふたりでよく来たじゃない」
「そうだったかな」
んもう、とミラルドは呆れ、
「だいたいなによ、そんな重い剣持ってきちゃって。タキアのうちに置かせといてもらえばいいのに」
と、クラースが持っている時間の剣を指さした。
「そんなわけにはいかないんだよ」
クラースは言い捨て、ずんずんと歩を進める。ブーツの先が少しずつ砂に埋(う)まるようになったころ、視界が開けた。
「ここから先は砂浜になるわ」
子供たちにはさまれるようにして歩いていたタキアが振り返る。
防波堤が切れると、波は思いがけないほど近くまで打ち寄せてきた。
「ラリーはおもに、ここをしばらくまっすぐに行ったところの崖地で琥珀を採取していたの。かなり古い地層らしいわ」
「そうなの」
ミラルドは頷きながら、海風にぶるっと身を震わせる。

いる。
海は燃える夕陽を飲み込もうとしていたが、赤く染まりながらも冷たそうに泡だって
「こっちのほうには船がいないのね」
「ええ。船着き場もないし、いつ来ても寂しいところだわ」
せめてもっと人目のある場所だったら、とミラルドは思った。
それからは全員しばし無言で砂を踏みしめて歩いたが、エリーがハッと前方を指し示した。
「あのへんよ。父さんがこの間まで採掘していたところ」
光が充分でないので正確なところはわからなかったが、崖は薄い茶色とベージュ色の岩が何層にも重なり合って形成されているようだった。
たしかに中腹には何カ所かの穴が認められる。
「よし。見てこよう」
クラースは時間の剣をミラルドにしっかり持っているようにと手渡すと、砂浜を駆けた。
(ふむ……琥珀というのは、こんなところに埋まっているものなのか……)
彼はかつて何人(いくつ)もの精霊と契約したが、その折りに必要だった契約の指輪の石も、元

は土中で眠っていたのだろうことに、今さらながら思いを馳せた。
よく見ると穴は相当数あいており、ラリーが途中で見込みなしと判断してやめたと思われるごく浅いものも含めると、それこそ無数にあった。
「なにもないでしょう、手がかりなんて」
「タキア」
背後から声をかけられ、クラースは肩をすくめる。
「全部調べたわけではないが、穴の中で倒れているということもなさそうだな」
「深い穴はとっくに調査ずみだわ」
「だろうな……ん？」
クラースの足もとで、なにかがチャリンと微かな音をたてた。ブーツの先は小さな穴に隠れている。
すぐさましゃがんで穴の入り口の陰に手を入れてみると、硬いものが触れた。
「これは？」
「あっ、父さんのだ！」
彼が引っぱり出したものをひと目見るなり、子供たちが叫ぶ。
「父さんの削岩ピックと刷毛ですっ」

「間違いない？」
クラースの視線を受けたタキアが、こっくりと頷く。
「ということは、ラリーはここで消えたってことか……」
と、ティミーが崖を蹴りながら、ぶつぶつ言い出した。
「ちっきしょう。どうなってるんだ。わからない……わからない……わからないときはどうすればいい……」
「ねえクラース」
ようやく追いついたミラルドは剣を重そうに持ち替えながら言った。
「どうしてもこの剣は使ってはいけないのかしら。ラリーが失踪した当日か前日に遡って、彼を拘束してしまえば……」
「ダメだ！」
ぴしゃりと叩きつけるクラース。
「じゃあ、なんのために剣を持ってきたの？　大切だから？　本当はそれだけじゃないんじゃないの」
「どういう意味だ」
クラースはミラルドを睨みつける。

「本当は、ひょっとしたら時間の剣を使うことがあるかもしれない、と思ったんじゃあ……」

「そんなことはあり得ない」

クラースはツイとそっぽを向いた。

タキアとエリーは、はらはらしながらふたりを見ていたが、ティミーだけはまだつぶやき続けていた。

「そうだ……わからなくなったら原点へ……原点へたちかえって考えるんだ……母さん！」

「えっ、なあに」

「琥珀を持ってきている？　ペン先の入ったやつ」

「ええ」

タキアがバッグから出した琥珀を手に取り、じっと見つめていたティミーは、

「やっぱり、さき一昨年だな」

と頷いた。

「ねえクラース。ミラルドの言ったやり方もいいとは思うんだけど。それじゃこの琥珀の謎は解けないいままだよね」

「まあ、そういうことになるが」
「僕が父さんに数学を習い始めたころ——父さん、よく言ってた。問題を解いている途中でわからなくなったら、最初に戻れって。物事は原点にたちかえることで初めてはっきりとその全貌を現すのだから、って」
ティミーは、琥珀をズボンのポケットに落とし込みながらじりっと一歩ミラルドに近づいたが、クラースは気づかなかった。エリーだけがほんの一瞬、兄の足に視線を投げた。
「だから、さき一昨年なんだ。僕は四歳まで喘息がひどかったんだけど、父さんが採ってきた琥珀のおかげで完治したんだよ。父さんと琥珀の関係の原点はそこにある」
「きゃあっ!!」
悲鳴を上げたのはミラルドだった。
少年に思いきり体当たりされ、布包みを砂に落とした。
「なにをするっ。やめろ！　いったいどうするつもりなんだ!!」
クラースが叫んだときには、ティミーはすでに抜き身の剣を手にしていた。
「お兄ちゃん……ダメっ。わたしにはお兄ちゃんが考えていることは、はっきりとわかるわ。でも三年前に戻っちゃダメぇっ！」

ミラルドが体勢を立て直し、兄を止めようと走り出したエリーの後を追う。
だがティミーの唇は動きはじめていた。
「時間の剣！　お願いだから僕の頼みを聞いて！　父さんが琥珀に出会った時間に連れていって！！！」
少年は両手で剣を頭上高く掲げた。
が、何も起こらない。
少年はふたたび叫んだ。
「どうしても行かなきゃいけないんだ。父さんを助けるために！」
剣の刃に沿って、細かな光の震えが走った。
(まずい！)
クラースの目が見開かれる。
「お願いだよ!!」
「やめろおぉぉぉぉ〜〜〜〜っ！」
クラースが砂を蹴って飛びかかる。
エリーの手をミラルドがつかまえた——そのとき。
「きゃあああああっ」

まばゆい光が剣から溢（あふ）れ、タキアの悲鳴をかき消した。
時空転移の光は四人の姿を隠し、やがて何事もなかったかのようにタキアの眼前に暗い海の風景を戻した。
「どうして……いったいなにが起きたっていうの……あ、あの剣は……？　ティミー、エリーっ!!」
彼女は冷たい砂の上にへたへたと座り込んだ。
本格的な夜が砂浜を包みはじめる――。

「……ん……」
なにかが落下してくる。規則的にそれは頬の上ではじけた。
ピチャン……ピチャッ……ピチャン……。
「えっ!?」
ハッと目を開けたミラルドは、あわてて体を起こそうとする。
「痛っ」

今度はこめかみのあたりに、別のなにかに刺されたような痛みを感じた。
「な、なによ、いったい……クラース？　いるの？」
初めは周囲が暗闇（くらやみ）に感じられたが、目が慣れてくるとはるか上方がぼーっと明るいことに気づく。
月が出ているのだ。天頂にかかる雲越しに、ふたつの月がはっきりと見えた。
「うう……ミラルドか」
すぐ近くでもそもそと動く気配がした。
「クラース、どうなっちゃったのかしら、わたしたち」
「やれやれ。やっちまったらしいな。おい、悪ガキ。無事か？」
クラースはため息まじりにティミーを呼んだ。
「ここにいるよ、クラース。エリーもいっしょだよ」
どうやら双子たちは少し前に気がついていたらしい。闇を透かすと寄り添う影が見えた。
「ねえ、ここはどこなの。森か林のようだけど」
ミラルドが誰にともなく訊ねると、クラースがうんざりしたように答えた。
「だから、三年前だよ。あの光を見たろう。ティミーが時間の剣を使いやがったんだ」

「やった!!」
ティミーはそれを聞いて飛び上がったが、すぐに「いててて っ」とうずくまる。
「気をつけろ。なんだか知らんが先の尖った葉がそこここにある。しかもさっきまで雨が降っていたらしいな……」
クラースは目を細めて夜空を見上げると、用心深く立ち上がった。
「どうせあの海岸からそう離れちゃいまい。とにかくここを出よう。窒息しそうだ」
あたりには濃厚な樹々の香りが漂っている。四人は濡れた地面に足をとられないように気をつけながら、とにかく歩き出すことにした。
クラースは時間の剣をティミーの手からもぎとり、二度と勝手に使われぬようしっかりと携えた。
「お兄ちゃん、だいじょうぶ?」
エリーが気遣うのに、ティミーはうるさそうに、
「平気だよ。黙って歩け」
と妹の背中を押す。
「だってここは……たぶんアセリア暦四一九九年なんでしょう? ほんとになんでもない?」

「しつこいな。それに、たぶんじゃないよ。僕たちは時間を超えたんだ」
ミラルドは、ふたりの会話に首を傾げた。
(エリーったら、さっきからなにをそんなに心配してるのかしら)
それからかなりの時間を費やし、密生する樹々をぬって進んだが、いっこうに視界は開けない。
「おかしいな」
クラースはつぶやいた。
アルヴァニスタの都近くにこんな場所があっただろうか。
そのとき、エリーが控えめにミラルドを呼んだ。
「ミラルドさん……さっきから気になっているんですけど」
「なあに?」
「月がちっとも動かないんです。ずいぶん時間がたっているのに……」
ミラルドは空を見上げた。なるほど、大小ふたつの月は相変わらず天頂で光を放っていた。
「本当だわ。ねえクラース、これって絶対おかしいんじゃ……」
「しっ」

クラースが鋭くミラルドを制した。
「聞こえないか……」
四人が耳をそばだてるまでもなく、斜め前方から、くぐもった音が断続的に流れてくる。
「……こわいわ。あんな低い音……まさかヘルナイトウルフの声だったりして？」
エリーが声を出すと「ばかっ」とティミーがそれを否定した。
「ヘルナイトは寒冷地に分布する属なんだ。ここにいるわけないだろ。だいいちこんなに夜間湿度があったら餌のマダラオユキネズミが繁殖不能だよ」
ミラルドは、そんな動物は見たことも聞いたこともないわと思いながら、クラースのあとについて小走りになる。
「あっ」
立ち止まったクラースと一緒に、ミラルドも声をあげた。
突然現れた岩山らしき隆起に道を塞(ふさ)がれたのだった。
「見ろ。ここから中に入れるぞ。どうやら地下洞窟のようだな」
「行ってみましょう」
ミラルドがコクッと喉(のど)を鳴らした。

「あなたたちはどうする？　ここで待っていてもいいのよ」
双子たちは揃ってふるふると首を振ると、ついてきた。

洞窟というよりはクレスたちと旅した坑道に似ている、と思いながらクラースは真っ暗な岩場をそろりそろりと下って行く。
もちろんここはあのモーリア坑道とはくらべものにならないほどちっぽけだし、人工的でもなかった。やはり天然の洞窟ということになるのだろう。
ミラルドは子供たちの足もとを気遣いながら、ゆっくりと歩を進めていた。
外から聞こえていた何かの音——あるいは声——が、少しずつ近くなる。
「ん？」
奥のほうがうっすら明るむ。
（なんだ？）
クラースは誘われるように、明るみの正体に近づいた。周囲の空間がいきなり広くなる。
「！　こっ、これは!?」

ちだった。

「うわあぁぁっ、と、父さんっ！」

「きゃああっ」

クラースは驚いて双子を振り返る。

「父さんだって⁉　じゃあ、これがラリー・オーウェンなのか……」

視線を戻すと、そこにはまるで蠢いているかのように樹木が絡まり合い、うねってい

た。

それは洞窟内に突如現れた林のようでもあったし、もしかしたらただ一本の巨大な樹

にすぎないのかもしれない。

異様なのは中央に建っている柱だった。地表から五〇センチほどは樹の幹なのだが、

その上は茶色い氷柱のように見える。柱は透けており、中には——目を閉じた男がひと

り、立ったままの姿勢で入っていた。どういう仕組みになっているのかわからないが、

柱は内側から滲むように発光している。

（これがラリー……。死んでいるのか？）

クラースは用心深く柱に近づき、そっと指先で触れてみた。
「硬いな」
「クラース、それは琥珀だよ。この匂い……松脂(まつやに)だ」
癖のある甘ったるい匂いを幾度も確かめながら、ティミーが告げる。
「しかし、琥珀がこんなに早くできるわけは……なにか違うものじゃないのか」
「前例があるじゃないか。理由はわからないけど」
少年はズボンのポケットからペン先の入った琥珀を取り出してみせた。その手はぶるぶると震え、今にも琥珀を落としてしまいそうだ。
「どうして……どうして父さんがこんなことにっ」
涙声を出すエリーの肩を、ミラルドはしっかりと抱いてやり、
「あきらめるのはまだ早いわ。なにかいい方法を考えてお父さんを助けましょう……」
と慰めかける。が、少女はミラルドの手を払いのけた。
「琥珀の中で生きていられるわけがないでしょ！」
ミラルドに目配せされ、クラースは黙って頷いた。時間の剣を振り上げ、柄の部分で柱を叩きはじめる。硬質な音が洞窟に響き渡る――。
「やめてぇっ！　父さんが壊れちゃう」

エリーが悲鳴を上げたが、やがて琥珀色の柱に無数の白いヒビが走った。

ピシピシ――――ッ。

ラリーの首から上を覆っていた琥珀が、ぼろぼろと零れ落ちた。

「さすがにまだ完全に固まっていなかったようだな。ただの松脂さ」

「父さんっ!?」

ティミーが駆け寄る。すると、ラリーの瞼がピクリと動き、ゆっくりと瞳が開く。乾き切った唇から、押し殺したような声が漏れた。

「……おお……ティミー……エリーもいるのか。なぜだ、私は死んだのでは…………夢、か」

違うよ、と少年は叫ぶ。

「僕が時間の剣にお願いして、アセリア暦四一九九年に来たんだ！　父さんが琥珀と出会った年だから、きっとなにかあると思ったんだよ」

ラリーは怪訝そうに眉を寄せて息子を見つめていたが、突然なにかに思い当たったように、カッと目を見開いた。

「逃げろ！　早くここから出るんだ！　殺されるぞっ！」

「え？」

クラースたちが思わず聞き返そうとしたそのとき。柱の背後でゴオーッと風が起こった。
「誰だ、邪魔をする者は！」
「あっ⁉」
　濃い茶の髪を逆立たせた女が、宙に浮かんでいた。
　裾の長い薄ものを着ているが、ひどくぼろぼろになって擦り切れている。
「せ、精霊か？」
　クラースは信じられないといった表情で女を見上げた。
「そうだ。私の名はアレフ。この古代松の大樹を守り続けてきた」
「なぜこんな……」
　アレフと名乗った精霊は、充血した目をスッと細めると舌なめずりした。
「引き寄せたのさ。私の核を持っているんだもの、その気になれば簡単だったよ。もうこの人間は私のもの……邪魔するんじゃないよ。ふふふ……」
　狂っている、とクラースはつぶやいた。
(核だと？　いったいなんのことだ)
「ちょっとちょっとクラース。あなたの話に出てくる精霊って、こんな濁った感じじゃ

なかったわよねえ。偽物じゃないの?」
ミラルドはクラースの手から剣を奪うと、まだラリーの首から下を覆っているものをガンガン音をたてながら割ってゆく。琥珀色のかけらが、ラリーの額を直撃する。
「痛っ! ちょっとお嬢さん、もう少しお手柔らかに願えませんかね」
意識がはっきりしてきたらしいラリーはそう言って苦笑したが、ミラルドの耳には入らなかった。
「なにをするのだ、女!」
アレフはミラルドの行為に怒り狂い、さらに髪を逆立てながら急降下する。
「よけろっ!」
クラースが叫ぶ。とっさにミラルドが飛びすさったあとには、甘い匂いのする液体がビシャッと広がった。
「くそう。このままではみんな柱にされるぞ」
クラースは無意識のうちにひとさし指と中指を立て、印を結んでいた。
(久しぶりだがなんとかなるだろう)
「みんな下がっていろ——出でよ、マクスウェル!」
召喚に応え、まばゆい光の球が洞窟内に現れた。球の中に、まっ白なあごひげを生や

した老人が浮かんでいる。
　ミラルドは、モーリア坑道でクラースが召喚したというマクスウェルを初めて目の当たりにして、思わず「うわお」と感激の声をあげた。
「呼んだかの」
「マクスウェル、ごらんのとおりだ」
　クラースが顎をしゃくると、老人はじっとアレフを見ていたが、静かに首を振った。
「おぬしの望みはこの精霊を倒すことか？　せっかくだが、精霊が精霊を亡きものにしようとするほど馬鹿げたことはないでのぉ。だいいち、アレフはただ操られておるだけのこと」
「操られている？」
「そうじゃ。が、正気に戻すことくらいはしてしんぜよう。このままでは、おぬしらみんな特大琥珀になってしまうだろうて。ほっほっほっ」
　誰に操られているんだ、とクラースが口にしようとした瞬間、マクスウェルの体から分かれ出た光の球体がラリーの足もとギリギリに落ちた。
「うわっ！」
　古代松の幹が弾け飛ぶ。が、ラリーにはなんのダメージもなく、彼はようやく自分で

動ける自由を得た。
「父さん、早くこっちへっ」
エリーの言葉に彼は子供たちのもとへと走る。
「ふたりとも……よく来てくれた」
ラリーは双子の頭ををぎゅっと抱きしめた。
その直後、マクスウェルの光は二度三度、落雷のように地面に激突して砕けた。
「きゃっ」
岩壁にひとり体を寄せて身をかがめていたミラルドが顔をあげたとき、マクスウェルはちょうど消えていこうとしているところだった。
（カッコいいじゃない。さすがは四大精霊を統括しているおじいちゃんね）
それからしばらくの間、誰も口を開かなかった。洞窟内は嘘のようにシンと静まり返ったままだ。飛び散った琥珀から滲み出る光だけが強弱を繰り返していた。
「ああ……」
マクスウェルの光に打たれ地面に落ち、うずくまっていたアレフが沈黙を破って声をあげる。
さっきとはうって変わって、高く澄んだ声だった。

「わ……私はいままで、なにをしていたのでしょう。あなたたちはどなたですか？」
逆立っていた髪は美しく波打ち、彼女の白い顔をふちどっている。
「なにも覚えていないのか」
クラースはアレフの変わりように驚きながら訊ねた。あんなに醜く充血していた瞳も、いまはキラキラと輝きを放ってさえいるのだった。
「ええ。私、なにかとんでもないことをしてしまったのですか？　あなたが助けてくださったのですね？」
「……まあいい。ところでおまえはまだ誰とも契約していないのだろう」
クラースの問いに、アレフは頷いた。
「それはいい。私の名はクラース・F・レスター。召喚師だ。私がおまえと契約したいと言ったら？」
精霊はほんの一瞬、言葉を切ってから言った。
「それは……助けていただいたのですから喜んでいたしますが、でも契約の指輪が必要なのです」
「わかっている。いまはなにも持っていないのだが、なんの指輪がいるのかな」
「クリスタルアンバーのゆび……わ……ぐわ……ぐわあぁぁぁ～～～っ！」

アレフは頭を抱えて地面に突っ伏した。
「おい、どうしたんだ」
「も……申し訳ありません……スタンザ様……」
「スタンザ？」
「すぐに始末を……ふ、ふふふっ、ふふぅ」
アレフがゆっくりと起こした顔を見て、エリーが悲鳴をあげた。
精霊の様子がまた元に戻ってしまったからだった。アレフはものすごい速さで宙に浮かび上がると、さっと手を降ろした。
「覚悟おし！」
ビシャッ！　液体がそこここに飛び散る。
「くそっ。ミラルド、早くみんなを外へ！」
「まかせて！」
クラースは印を結び、呪文を唱えると、
「出でよ、ノーム！」
今度は地の精霊を召喚した。
そのとき、すでに洞窟の出口付近まで戻っていたミラルドたちの悲鳴が聞こえた。

「今度はなんだっ」
クラースが振り返ると、ティミーとエリーが駆け戻ってくるのが見えた。続いてミラルドとラリー。そして四人の背後から悠々と大股でやってくる若い男の姿――。
「誰だ」
長身をマントに包み、一見、剣士のようにも見えたのだが、額から生えている二本の角が男の端正な顔に暗い陰を落としているのを見て、クラースはぎょっとなった。
「お前が……スタンザか」
そうだ、と男が頷く。残忍そうな目が冷たく光る。
「なんのために精霊を操っているんだ」
「決まっているだろう。我が主ダオス様のためここを守らせているのだ」
鼻で笑うスタンザを、クラースはぽかんと見た。
（へ？　こいつ、なにをマヌケなことを言ってるんだ）
「アレフ、侵入者どもをさっさと始末しろ！」
スタンザが精霊をひと睨みするのと、ふたたび香りの強い液体が飛んで来たのはほとんど同時だった。
「ノーム！　頼んだぞっ」

無数のノームが洞窟の奥に降り注いだ。轟音とともに地面は抉れ、岩が跳ね上がる。
と、スタンザが急にあわて出す。
「ま、待ていっ！」
「なんだよ」
クラースはミラルドたちが再び出口に向かって走って行くのを視界の端に捉えながら、時間稼ぎのためにゆっくりと訊ねる。
「回廊を破壊することは許さん」
「かいろう？　なんだね、そりゃ」
それは……と、スタンザはくちごもった。
「とにかく破れ目を増やすわけには行かないのだ。ダオス様の通り道は――」
「えー？　なんだって？」
クラースは後ずさりながら怒鳴った。
「ノーム、私が洞窟を出るまでたのんだぞ」
そう言い置いて、クラースは全力疾走でミラルドたちのあとを追った。
背後では岩盤が破壊される音が続いている。
「あっ、来た来た！」

ようやく洞窟を出た彼を待っていたのはティミーだった。
「クラース、こっちだよ。朝を見つけたんだ」
「……なんだって……？」
すっかり息が上がってしまっているクラースに苦笑しながら、ティミーは繰り返す。
「朝だよ。この針葉樹林を抜ける道があったんだ。朝になってた。外はちゃんと時間が流れてるんだ。みんな待ってるから――手を引こうか」
「ばっ！　人を年寄り扱いするんじゃないっ」
クラースは嫌なものを見るように、天頂にかかるふたつの月を振り仰いだ。そのひょうしに樹々の葉が頤（おとがい）を刺す。
（そうか。この林は琥珀を作る樹々の密生地というわけか）
尖った葉をちぎりながら、いまさらのように納得した。
（それにしてもダオスの残党とはな……）
スタンザという男が口にした〝回廊〟とはなんだろう、とクラースはむせるような樹々の香りの中で考えつづけた。

第三章

「おい、あそこに家があるぞ」
突然ラリーが明るい声をあげた。
確かに木立ちの間から、茶色い屋根が見え隠れしている。
「ほんとっ!? 休もうよ、ねえ、休ませてもらおうよ」
「そう願いたいね。私もこれ以上は歩けんよ」
ラリーはティミーの黒髪を撫でて弱々しく笑う。
「ちょっと様子を見てくるわ。そのあいだゆっくりしていてね」
「気をつけろよ」
「ええ。わかってるわ」
ミラルドはクラースにちょっと手を挙げてみせると早足になり、一行から離れていった。

地下洞窟から逃れ、針葉樹林を抜けたクラースたちは、すでに二時間以上歩き続けている。

なんの変哲もない山道ばかりが延々と伸びているので、いったいここがどこなのかさっぱりわからない。

（アルヴァニスタの近くだとは思うんだがなあ）

柔らかな草の上に腰を降ろしながら、クラースは考えた。

「ラリー。このまま四二〇二年に帰ったほうがいいんじゃないか」

「それは私も考えていた」

ラリーはクラースと向かい合って座り、頷いた。

「はじめは信じられなかったが、四一九九年に来てしまったなんてな……。妻も心配しているだろう……しかし、私が体験したことと道々君に聞いた話を考え合わせると、どうもすっきりしない」

「というと？」

「うん……」

彼は無意識に上着を撫でていた。胸にいくつもポケットがついているが、左胸のそれ

だけは無惨にちぎれている。
「さっき君は時間をトランプのカードに例えて話していたろう？　あれをひとつの概念として考えると、この四一九九年のカードは破れているか穴があいていることになるんだな」
「そういえばあのスタンザというやつも、破れ目がどうとか言っていたなあ」
クラースは手首の鳴子をシャラシャラッと鳴らしながら、ラリーの顔を見た。
「そうだ。つまりあのモンスターが言っていた回廊というのと、君の言うカードはだいたい同じものだと考えていい。時間は本来閉じた回廊というわけさ」
「なるほど」
そのとき、少し離れたところで花を摘んでいたエリーが駆けてきて小声で告げた。
「父さん、さっきから兄さんの顔色が悪いの」
「ん？」
ラリーは背筋を伸ばして、双子の兄の様子を窺う。
確かにティミーは青い顔をしているようだった。
「お待たせっ！」
ガサッと繁みを分けてミラルドが戻ってきた。

「うわっ、びっくりするじゃないか」
クラースがのけぞる。
「偵察してきたんだから、ちょっとは労ってよぉ」
ミラルドはクラースを睨みつけたが、すぐにラリーに笑顔を向けると、
「オーウェン先生行きましょう、大丈夫です。空き家のようだけど怪しい感じはしなかったわ」
と、再び家のほうへ足を向ける。
「よし。話の続きはあっちでしよう。ティミーおいで」
ラリーは父親の顔で立ち上がると、息子を呼んだ。

山間に建つその家は、空き家になってまだ間もないように見えた。
かなり大きな二階屋である。玄関の鍵は頑丈にかかっていたが、台所のドアは縄でくくってあるだけだったので、五人はとりあえずそこから中に入った。
不便なので引っ越してしまったのかもしれないとミラルドは考えたが、そのわりには家具や食器、乾物の類いがそのまま置いてあるのが不可解だった。

「はい先生、お茶です」
ミラルドが勝手に使わせてもらったカップを手渡すと、リビングルームの大きな椅子に落ち着いていたラリーは困ったように笑い、
「気になっていたんだが、その先生っていうのはよさないか。私はもうアカデミーの人間ではないのだし」
と言った。
「でも」
「クラースのように、ラリーとだけ呼んでくれ」
この人はただのぶっきらぼうなんですよ、とミラルドは肩をすくめてみせた。
「しかし……クラースにミラルド……君たちの話は妻から聞いていたが、まさか助けにきてくれるとは思わなかった」
「私も、まさかこんなことになるとはね」
クラースは皮肉めいた口調で言いながらティミーを見たが、ハッとなった。
「おい、どうしたんだ」
ティミーはソファの上で丸くなり、真っ青になって震えていた。
喘息の発作が起きるんです、とエリーが言う。

「なんだって？　喘息はもう治ったとタキアが」
「ええ。四一九九年の暮れでした」
だから三年前に来るのをあんなに必死で止めたのね、とミラルドは納得がいったが、ふと首を傾げる。
「あ……でも……確かにここは四一九九年らしいけど、ティミーは四二〇二年の状態のままのはずじゃあ」
「子供だからね。なにも時間を超えるなんて大げさなことがなくたって、ちょっとしたきっかけで体調が変わることもあるんだよ。熱を出したり風邪をひいたり……タキアもそれにしょっちゅう振り回されてる。そういうものだよ」
「そう、ですか」
ミラルドはなぜかひどく傷ついた気分になって、頷いた。
ラリーに悪意がないのはわかっているのだが、子供のことをなにも知らないといわれたような気がしたのだった。
(わたしだって村の子供たちに、読み書きを教えているのに……)
苦しそうな咳が出始めた。
「大丈夫だぞティミー。父さん、琥珀をいっぱい持ってるからな」

ラリーは上着の隠しから布袋を出してティミーのそばに寄った。
するると少年は微かに首を振り、ズボンのポケットをまさぐる。取り出されたのはあのペン先が混入した琥珀だった。
「おお、これか……！」
ラリーは声をあげ、その場に跪いて少年の手の中の石に見入った。
エリーが兄の背中を優しく撫でるうち、咳は止まった。
妹の片手は、しっかりとティミーに握られている。不安のために無意識にそうしたのかもしれなかった。それに気づいたミラルドは思わず微笑んだ。
クラースはティミーの様子に目を丸くし、
「驚いたたな。琥珀は本当にパワーストーンなんだな。これはますますアレフと契約したくなった」
と、つぶやく。
ラリーはぽっきりと折れてしまったペンを取り出して、琥珀の中のペン先の断面と見比べていたが、
「ぴったり合うな」
と唸った。それからクラースに向かって、

「根っからの召喚師らしいね」
とからかうように言う。
クラースは下唇を突き出して見せた。
「あたりまえだ。人間は魔法を使うことができないんだ。まずは精霊の力を借りることからはじめないとな。しかし、そう簡単なことじゃない。契約には高価な指輪が必要で……しかもなんだ、クリスタルアンバーだと？　聞いたこともない宝石だ」
「え、知らないかな。クリスタルアンバーというのは、こういう透き通った琥珀のことなんだが。ほら、こんな」
ラリーはポケット——一体いくつついているのか、また別のポケットだった——からなにかをつかみ出して見せた。
「えっ!?」
クラースは、もうちょっとでカップからこぼしたお茶をたっぷりと浴びるところだった。
「ま、まさか……契約の指輪!!」
それは無色透明の石がついた古い指輪だった。
「契約の？　違う違う、これはただのおんぼろ指輪さ。あそこの崖で見つけてね。妻に

見せたら欲しいというんだが、あんまり汚いし、この次の誕生日までにペンダントに作り替えてプレゼントする約束になってる」
「バカなっ！」
クラースはいきりたった。
「つ、作り替えるなんてとんでもない。それは精霊と契約するときに使う、契約の指輪だぞっ。召喚師の私が言うんだから間違いない！」
「しかしこんなに汚い……」
「そういうものなんだっ！　頼む、先生。その指輪を私に譲ってくれ！」
クラースはがばっと床にひれ伏した。
「しかし、妻がなんというか……」
ラリーは困り顔で布袋をひっくり返し、テーブルの上に一〇数個の琥珀を転がした。
「ほら、こっちのほうがいいんじゃないかな。小粒だが、どれも虫や鳥の羽なんかが完璧な形で入っている。好きなのを君とミラルドにあげるから」
まあ、と歓声をあげたのはミラルドだった。手近の石を手にとって窓からの明かりに透かすと、小さな蟻(あり)が三匹入っているのが見えた。まるで、生きているかのような美しさだ。

「ただなにかが、混入しているというだけじゃないんだ。よく観察してみると、琥珀にはあらゆる歴史が閉じ込められているんだよ」
ラリーの口調は次第に熱っぽくなる。
「たとえば昆虫だったら、えさを食べている途中のものもある。交尾中のやつらもいれば、まさに産卵している最中の母虫がそのまま入っていることもあるのさ。つまり琥珀とは、一瞬の歴史を切り取ったその結果なんだ。言ってみれば一個一個の石が閉じた回廊なんだな」
ミラルドがため息をもらす。
「この蟻たちは、お喋りをしているところだったのかもね……なんて綺麗なのかしら！」
「裏切るのか、まったく女ってやつはこれだからな」
クラースが怖い顔でミラルドを睨んだ。
「なによぉ。綺麗だから綺麗って言っただけだわ」
くすくすっと双子たちが笑う。すっかり気分がよくなったらしいティミーが訊ねる。
「家の中を見てきていい？」
「ああ、かまわんが……勝手に物をいじるんじゃないよ」

ティミーとエリーは父親に頷いてみせながら、リビングルームを出て行った。
「指輪のことはちょっと時間をくれないか。考えてみよう。それより、さっきの話の続きを」
ラリーの真顔を見て、クラースもいったんは引き下がらずを得なくなった。
「少し順を追って話しましょうよ。まずは、ラリーがどんな風にしてあの洞窟に来たのか」
ミラルドが水を向けると、ラリーは腕組みをして唸った。
「それがよくわからないんだ。朝家を出て、海岸近くの崖でいつもと同じ作業をしていた。で、気がついたらあそこに倒れていて……樹脂で固められてしまったんだが……そう言えば」
彼はふっと顔をあげ、眉をひそめる。
「確かあのとき、精霊が言ったな。ようやく引き寄せた、ずっとお前を待っていた、って」
「じゃあ、ずっと以前からラリーに狙いをつけていたってことになるのかしら……スタンザに操られていたから？　それともあの精霊の意志で？」
ミラルドが首を傾げた。その手の中では蟻入りの琥珀がほんのり温まっている。

「なんとも言えんな。それより、私もアルヴァニスタでいろいろ噂を聞いたが、ダオスはもう君が仲間と一緒にみごと倒したんだろう？」
「まあ、簡単に言うとそういうことだ」
このときばかりはクラースもまんざらではなさそうに頷いた。
あのスタンザという男、とラリーが言いかけたとき、ミラルドか突然悲鳴をあげて琥珀を放り出した。
「きゃあああっ！」
「なんだ、どうしたっ!?」
「こ、琥珀の中に目が……わたしを見ていたわ」
ミラルドは恐ろしそうに自分の体を抱きしめた。
たしかにいま、石の中から誰かの目が自分を見ていたのだ。
「自分の目が映っていたんじゃないのかな」
ラリーは笑いながら床に転がった琥珀を拾いあげて確認すると、
「ほら、蟻しか入ってない」
と、他の琥珀と一緒に布袋に戻した。
「で、でも確かに……」

ミラルドは反論しようとした唇を噛(か)みしめた。
(そうよね……わたしの顔が歪んで映ったんだわ。たくさん歩いたから、疲れてるのよね)
「しっかりしてくれよ」
クラースがため息をついた。

「ねえ、誰か来るよ！」
ティミーが戻ってきて報せた。
クラースたちはハッと体を硬くする。
「男の人がふたりです」
エリーがつけ加えたとき、玄関のドアが乱暴にノックされた。
「おい、誰かいるのか!?」
「開けるんだ。でないと村の連中を全員呼んでくるぞ！」
ミラルドがラリーに視線を当てると、彼は、
「私が行こう」

と立ち上がる。クラースたちもあとに続いた。
玄関の内鍵――全部で四つもついていた――をはずし、ドアを開けると男たちが飛び込んできた。
ふたりとも弓矢を背負い、狩りのいでたちをしている。
ひとりはひどく太っており、もうひとりは獲物を肩に担いでいるが、揃って三〇代後半くらいに見えた。
「あんたたち、村長の家でなにしてる」
殺気だった声に、ラリーは晴れやかに両手を広げて答えた。
「おお、これはこれは！　そうですか、ここは村長さんの家でしたか。どうりで立派だと思っていたんです。いや、勝手に入り込んだりしてお詫びのしようもありません」
「え……いや、俺たちは窓に人影がチラつくのを見たんでやって来たんだが……」
てっきり泥棒だと思ったのだろう。
「実は私たち道に迷いまして……つかぬことを伺いますが、ここはどこですかな」
「……どこって。ニルの村に決まってるじゃないか。あんたら、どこへ行こうとしてるんだ」
ラリーは咳払いしてほんの数秒時間を稼いだ。ニルというごく小さな村を頭の中の地

図で探し、不自然にならないように気をつけた。
「アルヴァニスタから――ベネツィア港まで、行くんですが」
すると、肩に山鳥を担いでいた男が「がはっ」というような呆れ声をあげる。
「バカかい、あんたら。南に下ってどうするんだよ。ぜーんぜんちがうよ、ぜーんぜん」
そういえば都のずっと南にニルという地名があったな、とクラースは密かに思い出していた。
「おお、やはりね。どおりで変だと思った。で、村長はどちらに？　ご挨拶せねばなりますまい」
ラリーが歌うように言うと、太った男は苦笑し、
「もういいよ、別に。俺が言っといてやらあ。村長はここを別荘に使っていたんだが、もう捨てたんだと。いまは家族で元の家に戻ってるよ」
と説明した。
ミラルドは肩をピクリとさせる。
「捨てた？　こんないい家を？　まだ新しくて家具や食器だって揃っていて……なんでまた」
「この辺にゃ、いつのころからかバケモノが出るんだよ。奥さんも、こんな可愛い子供

たちがいるんだから気をつけな」
　男はミラルドとラリーを夫婦だと思っているようだった。
「そっちの刺青兄さんもな」
「なんだとっ!?」
　ムッとしたクラースの袖をつかみ、ミラルドが作り笑いする。
「そうなんですよ、派手な親戚でもう……困ってますわ」
　覚えてろ、とクラースは心の中で叫んだ。
　そのとき、ティミーが山鳥を指さして言った。
「おじさん。その鳥おいしそうだねぇ。僕たちもうずっとなにも食べてないの」
「なんだって？　そりゃかわいそうに。坊主、いくつだ」
　ティミーはクラースにちらりと視線を投げると、
「四一九二年生まれだよ」
　と答えた。
「ふーん、じゃあ七つか。俺んとこの息子と同じくらいだな。よし、この鳥をやるから美人の母ちゃんに料理してもらって腹いっぱい食いな。なーに、疲れを休めてからゆっくり出ていってくれりゃいいんだ」

「ありがとう」
ティミーは天使の微笑で、まんまと山鳥をそっくり手に入れた。
「けど、くれぐれも気をつけてな。この先の林じゃバケモノのせいで、土地がぼこぼこ隆起しちまったっていう話だ。夜中に恐ろしい声を聞いた者もいる」
「なにかあったら村へ来るといい。その方向音痴でたどりつければ、だがな」
男たちは愉快(ゆかい)そうに笑いながら去っていった。
パタンとドアが閉まる。最初に口を開いたのはティミーだった。
「はい、美人の母ちゃん」
七、八羽の山鳥を、どさっとミラルドに押しつける。そのうちの何羽かはまだ生暖かかった。
「僕の演技もなかなかだろ？　ここが間違いなく四一九九年だってわかったし」
「そ、そうね」
どうやって料理しよう、と途方に暮れながらミラルドは頷いた。
「まず血抜きをしてしまえば、あとは簡単なはずですから」

エリーはてきぱきと山鳥の羽根を毟(むし)ってゆく。黒と青灰色が混じったような、珍しい色合いだ。
「わたしも鳥料理ってしないわけじゃないんだけど、この鳥は初めて見るわ。どう？」
ミラルドは鳥の首を握り、目の高さまで持ち上げてみせた。
「私もです。でもあの人たちが、わざわざ獲ったんですから食べられますよ」
「そうよね。エリーがいてくれて心強いわ」
台所にふたりで立ち、食事の支度をしながらミラルドは少女に笑いかけた。
「そんな……私なんか」
消え入りそうにつぶやくエリーの口調に、彼女は手を止める。
「ねえ、ずっと気になってるんだけど。あなたはどうしてティミーの言いなりになってるのかしら」
「え？」
「だって、他人のわたしから見たってあなたの兄さん、妹を可愛がってるようにはとても見えないわ。妹っていったって双子なんだから、もっと対等にやればいいのよ」
エリーは黙ってミラルドを見上げた。そのばら色の頬に笑みが浮かぶ。
「そうですね。ミラルドさんはクラースさんと対等に話していますね」

「当然でしょう。しかもわたし、年下なんですけど」

ミラルドは笑った。

リビングから男たちの話し声が聞こえてくる。

「お兄ちゃん、昔は体が弱くて。なにをするのも、あたしがいないとダメだったんです。寝るときも手をつないでいたし……いつ発作がおきるかわからないから、怖かったんでしょう」

「なるほどね」

「でも父さんの琥珀のおかげで元気になって、いろいろ自信がついたんです。弱虫だった過去の時間をなかったことにしたいんだと思います。それで、わざとあんなものの言い方を」

(そういえばさっき、ソファでもエリーの手をしっかり握っていたわね)

ミラルドが思い出したとき、背後でカタッと物音がした。驚いて振り返った彼女は、そこに少年の姿を認めてどきりとした。いつからかそこに立っていたらしい。

「あ、あらティミー。支度ができるまでもうしばらくかかりそうなんだけど。なにか用？」

「……父さんが水を汲んでくるってさ。裏に小川があるみたい」

「助かるわ」
ティミーはぷいと顔をそむけると、行ってしまった。
「……まずいこと聞かれちゃったかしら」
「だいじょうぶですよ」
エリーは静かに首を振った。

暖かい食事を胃に流し込み、思い思いの部屋で仮眠をとると外はすでにとっぷりと暮れていた。
地下洞窟へ引き返すと言い出したのは、クラースだった。
「もう一度あの精霊と会って話がしたいんだ。聞きたいことがいろいろある」
「いまから？　あそこにはスタンザがいるわ。ニルの村人もモンスターの声を聞いた人が、いるって言ってたじゃない。スタンザとは別のモンスターがいるのかもしれない。危険よ」
ミラルドが反対すると、
「私も一緒に」

とラリーが立ち上がる。
「ぼこぼこに隆起した地面というのは、学者として興味があるんでね」
思わず頬を膨らませかけたミラルドを見て、ランプに火を入れていたティミーがため息まじりに笑った。
「三人で行ってきていいよ、ミラルド。僕たちはここにいるから」
「そんな！　子供だけ置いていくなんて」
「眠いんだよ。充分な睡眠をとらないと成長ホルモンは分泌されないんだ。常識だよ」
「……ご親切に教えてくれて、どうもね」
ミラルドは苦笑した。
「そのかわり、洞窟の様子をあとでちゃんと教えてほしいな。ね、父さん」
「わかった。じゃあ大人だけで行くとするか。朝までには戻れるし、ティミーを連れていってまた発作が起きるとまずい。大丈夫だな、エリー」
父親の決断に、エリーは素直に頷いた。
松明(たいまつ)を持つのは生まれて初めてだった。ラリーが水を汲みに行ったときについでに拾

ってきたものである。
夜の静寂の中を、炎が燃える音と三人分の足音だけが進んで行く。
ミラルドはぐらぐら揺れる枝から降ってくる火の粉が髪や服につかないように、細心の注意を払って山道を歩いていた。獣の気配が感じられないことに、内心ホッとしている。
「さあ、そろそろ針葉樹林の近くだ。いったん火を消そう」
クラースが、先頭を行くラリーに声をかけた。
空にはふたつの三日月。月明かりというほどの明るさは期待できないが、あの林の中にまだ満月がかかっているとすれば、動きやすくなるはずだ。
「この暗さじゃ、土地の隆起は確認できないんじゃないかしら」
地面につけた松明の先をクラースに踏んでもらいながら、ミラルドがひとりごとのようにつぶやく。
「そうだね。だが昼間の村人の話を聞いて、あの地下洞窟自体が隆起による産物ではないかと私は考えているんだ。時間の歪みが大地をも歪ませたとね」
「なるほど。その答えを精霊に聞けるといいのだが」
クラースは、暗闇の中にいるラリーに向かって応えた。

幸いなことに、三人が洞窟内に入ったときにはスタンザの気配はなかった。
巨大な樹木がそびえ立ち、耳を澄ますと――樹液の流れる音なのだろう――さらさらという水音が聞こえた。
「アレフ、いるか」
クラースが呼びかけると、あたりがうっすら明るくなり、アレフが宙に浮かび出た。
「正気のようだな」
はい、と美しい精霊は頷いた。
「あの者が近くにいないときは、私の心は私のもとにあるのです」
「聞きたいことがあって来た。いまスタンザはどこにいるんだ?」
ラリーが訊ねると、アレフはちょっと首を傾げるような仕草をしていたが、
「離れています。でもあの者が林の外に出ることはありません」
と答える。それから改めてラリーをじっと見つめた。
「私は、あなたにお詫びをしなくてはなりません。こんな場所にあなたを引き寄せたりして――」

「モンスターに操られていたんだ。仕方ないさ」
それだけではないのです、と精霊は微かなつぶやきを漏らしたが、三人の耳には届かない。
「……聞きたいこととはなんでしょう」
「スタンザが戻ってくるといけないから簡潔にいくぞ」
クラースはアレフを見上げ、
「まず、〝回廊〟とはなんだ？　破れ目とは？　あのモンスターはここで一体なにをしているんだ？」
とせきこんで訊ねた。
アレフは三人の顔を順番に見渡し、
「わかりました、お答えしましょう。私の申し上げることとは、あなた方の世界の常識とは少し違うかもしれませんが……」
と話しはじめた。
「私は、はるかな過去からずっとこの林を守ってきました。私の樹脂が、琥珀という実を結ぶほどの長い長い時間です。静かで平和な世界だったのですが……あるとき、なんという偶然か、ちょうどこの場所を通って時間を旅する男が現れたのです」

ダオスだな、とクラースは唇を嚙んだ。
「はい……。ダオスはたくさんのモンスターを従え、何度もここから他の時間へと転移したり戻ってきたりを繰り返していました。この洞窟は時間の破れ目なのです――目には見えませんが。私は古代松が傷つくのを恐れて必死で抵抗し、ここの見張りをしていた男です。スタンザはそのころからダオスの命を受け、ダオスたちを通すまいとしましたが、そのつどスタンザは私の心を捻じ曲げ、操ろうと……」
アレフは苦しそうに深いため息をついた。
「時間というものには……枝があってはなりません。一瞬一瞬が、閉じた回廊である必要があるのです」
「あ……じゃあわたしたちもよくないことをしてしまったのね？」
ミラルドがクラースの持っている時間の剣に、ちらりと視線を走らせる。
「いいえ。それは精霊の力により精製された剣。破れ目などできるわけがありません」
アレフは首を振りながら微笑んだ。
「それを聞いて安心したわ。わたしの考えを言ってもいいかしら」
「どうぞ」
ラリーがミラルドを促す。

「ずばり、破れ目をふさげばいいんじゃないの？」
「はっ！」
クラースが出した不必要に大きな声が、洞窟内に響き渡った。
「そいつはまた高度な意見だな。子供にでもわかるさ、そんなこと。ふさぐったって、簡単にいくわけがないだろ？　針と糸でも持ってきたのか」
「だから、理屈としてはってことよ。意地悪な言い方しないで。ねえ、アレフ」
不機嫌になったミラルドが同意を求めたが、精霊は言葉を濁した。
「ええ、でも……たとえいったんふさぐことができても、ダオスがいつまたやって来るかわかりませんし……そうしたらすべては無駄になってしまいます」
「それなら心配ない」
クラースがすでにダオスは倒されたのだと話して聞かせると、アレフは驚愕（きょうがく）の表情になった。
「ほ、本当ですか、それは!?」
「ああ。間違いない」
アレフはそっと自分のまわりを見回していたが、
「それでは、破れ目を閉じさえすればこの洞窟も、林も、全部もとどおりになるのでし

ようか」
と訊ねた。
「隆起のことかな」
ラリーもあたりを見回しながら言う。
「はい。ここにはもともと洞窟などなかったのです。この樹の幹も……ほとんどは地上に出ていた部分ですが、空洞ができたためにこんな暗がりに……。林のあちこちで同じような現象が起きています。けれど、それだけではありません」
「針葉樹林全体の時間が止まってしまっていることか」
アレフは悲しそうに頷いた。
ラリーは腕を組んでじっと考えていたが、やがて顔を上げた。
「たとえば破れ目をこのままにしておくと、どんな危険がある?」
「別の時代の誰かがここに迷い込み、二度と戻れなくなってしまうかもしれません」
たとえ私が引き寄せなくても、と精霊は答え、
「けれど破れ目をふさぎ、歪みを正す方法を私は知らないのです」
と悲しそうに言った。
クラースたちが黙って顔を見合わせていると、突然アレフが体をビクビクッと痙攣(けいれん)さ

せる。
「く……っ！　逃げてください……早く……スタンザがきます……」
「なんだって!?　スタンザはひとりなんだろう？」
「は……い……ああっ」
宙に浮いていたアレフの体が落下した。
「だ、大丈夫っ？」
走り寄ろうとしたミラルドをキッと見つめる精霊の瞳は、すでにギラギラと充血していた。
「いいから早く行って！　ここでスタンザと戦っても回廊の歪みがなくなるわけではありません。どうか……よい方法をさがして……ううっ」
「アレフ！」
「行こう」
クラースがミラルドの腕をつかむ。
「なによっ、こんなに苦しんでいるのに」
「精霊の言うとおりだ。ここはいったん引き上げだほうがいい」
「だって……！」

ミラルドがクラースに引きずられるようにして行ってしまうと、ひとり残されたラリーはそっと胸ポケットに手を当てた。クリスタルアンバーの指輪の感触――。

ふっとアレフが顔をあげる。

「待っていてくれ。必ず方法を見つけて戻るからな」

それだけ言うと、ラリーは踵を返して走り出した。

「ラリー・オーウェン……」

すっかり低く掠(かす)れてしまった声が、精霊のくちびるから漏れた。

針葉樹林の外へ出ると、ふたたび夜明けが待っていた。

幸い、洞窟へ向かうスタンザとは出会わずにすんだようだ。

木立ちを透かし見ていたラリーが「おお」と声をあげる。

本当に大地のあちこちが隆起しているのが見てとれたからである。これまで何度も歩いて気づかなかったのが不思議なくらいだった。

「ひどいなこりゃ……」

ラリーは、昇ってくる太陽に、まぶしそうな表情になりながらつぶやいた。

「ねえ、でも大収穫だったわよね」
林からいくらか離れたところで、ミラルドがそれぞれ疲れた表情でなにごとか考え込んでいる男たちに明るく言った。
「まあな。精霊のおかけでだいたいのことはわかった。しかし」
ラリーがクラースの言葉を受けて「ああ」と頷き、
「しかし、だな。かんじんの回廊修復の方法がわからないことにはどうしようもない」
と唸った。
「知らないの、クラース」
ミラルドの問いにクラースはムッとなる。
「あいにくとな。穴の開いたトランプは修理しようがしまいが、もうゲームには使えないからな」
「あら、なんでよ。もったいないじゃない」
「もったいないって……頭悪いなおまえ。どの札かわかっちまうだろ」
「なーるほど。頭いいわね～」
「なんだと……」
クラースは口を開きかけたが、無意味に言い争っても仕方ないと思ったのか、ただず

んずんと歩を進めた。

「えっ⁉　王立アカデミーに、わたしが？」

ミラルドは驚いて、空いたスープ皿にスプーンをとり落とした。

ティミーが神経質に顔をしかめる。

無事に空き家に戻った三人が、テーブルを囲んでいるときだった。エリーは食料庫から使えそうなものをさがしてきて朝食を作り、父親たちの帰りを待っていた。

「いいの、ほんとに？　わたしだけ行ってもいいの？」

押えきれない興奮がミラルドの顔を輝かせた。と、次の瞬間、いきなり曇った。

「あああ〜っ、いっけない！　タキアの家にドレス置いてきちゃった……」

クラースが大きな咳払いを二度三度する。

「なにか勘違いをしてやしないか」

「へっ？」

「セレモニーに出席するつもりのようだが、それは三年後だ」

「……あ。そうでした……わたしったらつい」

ミラルドは恥ずかしそうに肩をすくめた。
ティミーとエリーはくすくすと笑い合っている。
「じゃあ、なんでアカデミーへ？」
「王立図書館へ行って調べものをしてきてほしい。もちろん、卒業生だと名乗って、誰か適当な教授をつかまえてもらってもかまわない」
「まさか……」
ミラルドはクラースの顔をじっと見つめる。
「方法をさがして来いっていうの？」
「そうだ。なんてったってあそこは宝の山だからな。どんな魔法書が埋もれていないとも限らない」
「……わかったわ」
ミラルドは唇を拭ったナプキンを静かに置いた。
「やってみる。すぐに出発するわ」
「ダメだよ」
ティミーが鋭く口をはさむ。
「すぐはダメ。昔の人は言ったんだろ？　親が死んでも食休み、って」

殺すなよ、とラリーが苦笑した。
「わたし、二五歳に見えるかしら」
昼過ぎに出発する際、ミラルドは髪に手をやりながらクラースにそう訊ねた。
「心配するな。おまえは老けるタイプじゃないんだろ。どうやったって二八以上には見えないから」
「………行ってくるわ」
ミラルドの背中が山道に小さく消えてしまうまで見送って、クラースは大げさにため息をついた。
「まったく意外な一面を見るようだよ。あいつがあんなに外見を気にするとは」
「クラース」
ドアを閉めようとしていたクラースは不意に呼びかけられて、ギクリとする。
(聞かれたか?)
「よけいなことを言うようだが……」

ラリーだった。
「きみはもう少し女性に優しくしたほうがいいんじゃないか。あれではミラルドがかわいそうだ」
「お気遣いなく」
クラースは無表情に言ってのけた。
そのとき、パタパタとティミーが走ってきて父親の腰にぶらさがった。
「ねえ父さん。ゆうべの話をしてよ。約束だよ」
「わかったわかった。それじゃあっちに行こう」
息子を腰にくっつけたままリビングに戻ってゆくラリーに、
「あんたこそ甘すぎるんじゃないのか」
と、クラースはつぶやいた。

「ふうん。精霊の心身っていうのは精妙にできてるんだな」
父親から昨夜のできごとの一部始終を聞き終わった双子の兄は、天井を見上げて感心

したように言った。
午後の陽射しがいっぱいにさしこむ窓辺でするには不似合いな話題だったが、仕方ない。
「感応性が高いのでしょうね。でもなんだかかわいそう」
と、エリーは睫毛を伏せた。
「僕もそう思うよ。ねえクラース、ちょっと聞きたいんだけど」
「なんだ」
「契約以後の精霊の属性なんかは、どうなるのかな」
「え。属性は別に変わらないと……」
一瞬とまどったクラースに、ティミーはもう一度わかりやすく繰り返した。
「エレメンツじゃなくてさ。つまり、クラースがアレフと契約しても、まだ彼女はスタンザに狂わされてしまうのかどうかってこと」
「ああ、そういう意味か。それはたぶん……はっきりとは言えないが、少なくともいまよりはましだろうな」
「だよね」
ティミーは父親のほうに向き直ると、

「そういうわけだからさ、父さん。この際クリスタルアンバーはあきらめて、クラースにあげなよ。母さんはきっと父さんがくれるものなら、ガラス玉だって何だって喜ぶと思うよ」
と言った。すると、黙って聞いていたエリーも身を乗り出した。
「父さん、あたしからもお願いします。クラースさんに精霊と契約させてあげてください」
ラリーはあっけにとられたように「むう……」と唸ったが、やがて笑い出した。
「ははは。ふたりに言われちゃ仕方がないなあ。いや、実はなクラース」
ラリーは真顔に戻る。
「昨夜、ほんとうは洞窟で迷ったんだ。君に指輪を渡すべきじゃないかとな。スタンザが近づいてきて結局そのままになってしまったが……。アレフは私をあんな目に遭わせたが、スタンザのことを考え合わせても、憎めなくてな」
「ラリー……」
ラリーはポケットから指輪の包みを取り出すと、クラースの手に載せてやった。
「いいのか、本当に？」
クラースは信じられない思いで包みを開け、無色透明の石のついた指輪をそっとつま

みあげた。
「もう半分あきらめてたんだ……すまない。礼を言うよ」
彼は深々と頭をさげた。
「なあに。そのかわりいつかどこかででっかい琥珀を拾うことがあったら、私にくれ」
「ああ、そうする」
クラースはがっちりとラリーの手を握る。
「でも……もしクラースさんが契約しようとしているところに、モンスターが戻ってきたらどうするの？　きゃ」
エリーは、疑問を口にしたとたん兄に髪を引っ張られ、小さな悲鳴を上げた。
「なんでこんなときに水を差すようなことを言うんだよっ」
「ご、ごめんなさい」
「こら、やめろよ」
クラースはティミーに妹から手を離すよう言い、「確かにな」と頷いた。
「心配するなって、クラース。僕に考えがあるから」
「考え？　危ないことはごめんだぞ」
ティミーはクラースをキッと睨むと立ち上がった。

「子供扱いすんなよな」
「子供じゃないか」
「うるさいなあ。僕は僕が弱虫じゃないって証明してやるんだ。昔から弱かったことなんて一度もなかったんだから！」
ダッと走り出す。
「なにを言ってるんだ？　おい、ティミー待ちなさい！」
ラリーが呼び止めたが、少年の足音は廊下を突っ切り、二階へと上がっていってしまった。
クラースはほんの少し傾き始めた陽の光に指輪をかざしてみながら、ミラルドが無事に都へ到着するよう、密かに祈った。

第四章

身震いするような静寂に包まれて、ミラルドは山道を急いでいた。
地下洞窟から空き家まで歩いたときには、確かに小動物の気配もあったように思うのだが、いまは足もとで枯れ枝が折れるパキンという音にも飛び上がってしまう。
(どうしてこんなに静かなのかしら……山鳥も鳴いていない……気持ちが悪いわ)
ミラルドは持ってきた地図を広げ、進むべき方角が間違っていないことを確かめた。
(こんなことなら一緒に来てって頼めばよかった)
クラースにひとりでアカデミーの図書館に行ってくるよう言われたとき、本当は断りたかったのだ。
だが子供たちの手前もあり、どうしても「怖い」とは言えなかったのである。
「やっぱり女だと思われてないのかもねぇ」
ミラルドは淋(さび)しい気持ちに襲われてつぶやいたが、ふるふるっと首を振る。

ミラルドはうれしくなって思わず目を凝らしてみた。この際、鹿でも熊でもかまわない。
「え!?」
だが、数歩その動物のほうへ近づいてみた彼女の足はピタリと止まる。それから震えが来るまでに、いくらもかからなかった。
「あれは……!?」
よく見ればそこに広がっているのはひときわ色濃い樹木の連なり——針葉樹林だった。
いつの間にかあの林の近くを歩いていたらしい。
木立ちの間からこちらをじっと見ている男は、スタンザに違いなかった。
距離はあるが、額からにょっきりと生えている二本の角ははっきり見てとれる。
ミラルドの喉の奥が鳴った。
逃げなくてはと思うのだが、足が竦んでしまっている。

（クラース……助けて……）
だが、スタンザが近づいてくる気配はなかった。
どれくらいそうしていただろう、モンスターの姿がふっと林の中に消えた。
魔法が解けたようにミラルドの体が自由になる。
「きゃあああぁぁぁ～～～～っ!!！」
悲鳴をあげながら彼女は走った。
「もう、わたしをこんな怖い目に遭わせてっ。絶対あいつのこと許さないんだから！
クラースのバカぁぁぁっ！」
モンスターの気配を感じて息を殺していた鳥たちが、驚いてバサバサと飛び立った。

「図書の閲覧ですね？」
入り口のカウンターにいた司書が、ミラルドに微笑みかけた。
髪をひっつめにした、いかにも融通のきかなそうな女性司書だった。
「ええ、そうよ」

「こちらの卒業生ということですので、問題ありません。どうぞごゆっくり」
彼女はミラルドがあらかじめ記入して提出した書類をチェックしながら、職業的な笑みを浮かべる。
ミラルドは「ありがとう」と踵を返しかけたが、また向き直った。
「ねえ、王立図書館って、いつからこんなに厳しくなっちゃったの？　わたしが在籍していたころはもっと自由で、あなたみたいな見張りの人もいなかったわ」
「見張りではありません。図書館司書です。本当はここには受付の女性がいるのですが、今日はあいにく休んでおりまして」
司書は無表情だったが、受付の仕事をやらされるのは不本意だと思っているらしい。
ミラルドは背後に広がる閲覧室を振り返り、学生たちが静かに本を読んだり調べ物をしている様子に視線を走らせた。
(昔はもっと活気があった気がするけど)
「なにか問題でも起きたのかしら。書物がごっそり窃盗団にやられて以来、入館チェックが厳しくなったとか？」
「……よくご存知で」
司書はミラルドをじろじろと無遠慮に眺め、それから声をひそめた。

「ここだけの話ですが、二年ほど前になりますか……エルフの歴史に関する蔵書の一部が紛失したのです。持ち出し禁止のものばかりでした。表向きはただの泥棒の仕業ということになりましたが、ここの教授や職員たちの間にもともとあった亀裂が深くなってしまったのです」
「亀裂というと」
「エルフとハーフエルフの、ですわ。エルフはハーフエルフの客員教授が嫌がらせにやったと言い、ハーフエルフは自分たちを嵌めるためにエルフがわざと蔵書を隠したのだと噂しまして。それ以来、蔵書管理と入館者チェックが強化されたんです」
「なるほど。よくわかったわ」
ミラルドは頷いた。
(確かに昔から両者の対立みたいなものはあったけど……水面下ではますますひどくなってるっていうわけね)
「あっ、あの」
さっそく魔法書をさがしに行こうとしたミラルドを、今度は司書が呼び止める。
「背中にゴミが。木の葉と泥がついてます」
「……ありがと」

ミラルドは背中をぱっぱっと手で払った。
アルヴァニスタの都に入ってから宿で仮眠をとったのだが、服の背中にまでは気がまわらなかったのである。
魔法書のコーナーはすぐに見つかった。見上げるほどの棚が延々と続く光景に、ミラルドの頬は緩んだ。
「懐かしいわぁ。ひんやりした空気、古い本の匂い！」
細い指が、分厚い本の背表紙を次々いとおしそうに撫でた。

半日後。
「時間の回廊、時間の回廊……と。これにも載ってない――――！！！」
『時間の魔法学』という本をパタンと閉じる。
ミラルドは机の上に山積みになった本の陰に突っ伏し、深いため息をついた。
「回廊の破れ目の修復の仕方なんて、いったいどの本に書いてあるっていうの？　もう、誰か手伝ってよ！」
やけくそに言うと、それまで鬼気迫る形相で調べ物をするミラルドを珍しそうに遠巻

きに見ていた学生たちが、さっと顔をそむけた。
「なによ、意地悪。やっぱり誰か教授にあたるしかないかしら」
「……そのとき、人間以上の大きな生体エネルギーを持つものを内包する必要がある。ただし――」
「え？」
「生体エネルギーは人間・ハーフエルフ・エルフの順で強くなるが、エルフの内的エネルギーを電気などによって化学変化させてもモンスターのそれには追いつかず……」
「ええっ!?」
ミラルドは跳ね起き、自分の横に座ってぶつぶつと本を音読している男の横顔を食い入るように見つめた。
「クラースっ！」
「よう」
いつの間にか隣りに腰を下ろしていたのは、クラースだった。
「よう、じゃないでしょっ!?　なんなの、どういうことなの、いつからいたの？」
「たったいま」
クラースは本に目を落としたまま、ふっと笑った。

「もしかして……見つけたの」
「ああ」
「この……っ！」
ミラルドは自分でも気づかないうちに、クラースの服をつかんで食ってかかっていた。
「なによいまごろっ。ひ、ひとの気も知らないでっ。怖かったんだからね、もう！」
「やめろよ。わざわざ歩きづめで来てやったのに」
クラースは眉をしかめてみせた。
「わたしが心配だから来てくれたんじゃないの？」
「だーれが。心配は心配でも、おまえじゃ本が見つけられないんじゃないかと、それが心配だっただけだ。そしたら案の定じゃないか」
ミラルドはぎゅっと唇を噛みしめる。
「本を見つけたら見つけたと、教えてくれたっていいじゃない。こんな無駄骨を……」
「落ち着けよ、ミラルド。私はたったいま来て、おまえがあらかた荒らし終わった棚に残っていた本を、カンを頼りに手に取っただけだ。胸ぐらをつかまれるような覚えはないぞ」
「……そんなあ」

すっかり脱力したミラルドがふたたび机に突っ伏していると、足音が近づいてきた。
「ミラルドさん、クラースさん、でしたわね。少し静かにしていただけませんか」
「え？」
ミラルドが顔を上げると、あの司書が厳しい表情で立っていた。
「他の学生の迷惑になります。といってももう閉館時間ですが」
「……あらそう。すっかり長居しちゃって」
クラースは手にしていた本をちょっと持ち上げてみせ、
「これを借りたい」
と、司書に言った。
「それはできません。持ち出し禁止指定図書ですから」
「私たちはラリー・オーウェン教授の命で来ているんだが、それでもダメかな」
「なんですって？」
ラリーの名を聞いたとたん、司書の頬がさっと朱に染まった。
「オーウェン教授……私、憧れているんです。あ、いえ、アカデミーの人間なら誰でもそうだと思いますわ。優しくて、情熱的で……ご結婚も駆け落ちだったそうで、素敵ですよねぇ。どうぞお持ちになってください。ご返却はいつでもけっこうですからと」

「ああ、伝えておく」
クラースは立ち上がり、悲劇的に散らかっている本の山を片づけようとしたが、司書に止められた。
「そんなこと、私がやりますわ。さあ、早く教授に本を届けてさしあげてください。私、おふたりがお知り合い同士だってすぐにわかりました」
カウンターの前まで来ると、ミラルドが肩をすくめた。
「かわいそうに、彼女。もうすぐラリーがここを辞めちゃうの、知らないのよね」
「しかし、私たちが知り合いってのは、なんだ？」
クラースの問いにミラルドは、
「さあ、これのことかしら」
と、帽子の鍔（つば）にくっついていた木の葉を摘み上げて笑った。

クラースが不眠不休の状態だったため、その晩はミラルドが仮眠に使った宿の部屋にそのまま泊まることになった。
「……つまり、破れ目という負のエネルギーに相当する強い生体エネルギーを、そこへ

置けばいいわけね」
「簡単に言えばな」
夕食後、ランプの明かりで図書館から持ってきた本を読み終わったふたりは、回廊の修復方法について話し合っていた。
「モンスターのエネルギーが一番だというなら、うってつけのが林にいるじゃない。あいつと山の中で遭っちゃったときは、どうなることかと思ったわ。あいつをやっつけて破れ目に置けばいいのよ」
ミラルドが身震いしながら言うと、クラースは苦笑した。
「ほんとにお前は簡単に言うよ。ただ殺して置くだけじゃ一時凌(しの)ぎにしかならん。生体はすぐに滅びる」
「だから、ほら、ここに書いてあるわ。松柏科の樹液で固めるって。これって琥珀のことでしょう？　たしかに琥珀にしてしまえば半永久的にそこにあるわけだし……すごい偶然よね」
いや、とクラースは首を振った。
「偶然なんかじゃない。なぜダオスの通り道に、あの古代松のところが選ばれたと思う？　覚えているか、私が聞かせたヴォルトの話」

「ヴォルト？　ええ、もちろん」
ミラルドは頷いた。
「……たしか、ヴォルトの電気でレアバードをパワーアップしたんでしょう？　ついでにアーチェ・クラインのほうきも。なんでも魔力を電気エネルギーに変えて……あ、わかった」
ミラルドはぱちんと両手を合わせる。
「もしかして、あの地下洞窟が電気を帯びていて、どういう作用かはわからないけど、それがダオスの行動をスムーズにさせたとか」
「おそらくは、な。それだけに、スタンザという見張りまでたてて、あそこを守ろうとしたんだろう。つまりアレフの古代松はたまたま通り道に生えていたわけではなく、琥珀があるから選ばれたんだ」
ということは、とミラルドはベッドに仰向けになり、天井を見上げながら整理してみた。
「つまり、スタンザ入りの琥珀で破れ目をふさげばＯＫ、なのね？　でも、スタンザと戦うときアレフが狂っていたらやっかいよね」
「それは大丈夫だ」

クラースは急にごしごしと髪を擦り始めた。
「なにやってるの？」
ミラルドは横向きになって、椅子に座っているクラースを見た。
クラースはやがて手を頭から高く離した。と、髪が逆立った。
ミラルドは思わず吹きだし、起き上がった。
「もう、なんの手品よ」
「琥珀だよ。こんなに電気を帯びやすい」
「え……、それって、ちょっと、まさか契約の指輪!?」
ミラルドは驚いて、クラースが手の中に持っていた無色透明の石のついた指輪をもぎ取り、ランプの明かりにかざしてみた。
「おまえが出発してから、ラリーが譲ってくれたんだ」
「よかったじゃない！　じゃあ早く戻って契約を」
「おいおい、ちょっと寝かしてくれ」
急にとろんとした目になると、クラースはベッドに倒れこむ。
ほとんど同時に寝息が聞こえ始めた。
「まったくこのひとは……」

疲れきった体に毛布をかけてやりながら、ミラルドは微笑んだ。
(ずいぶん予定と違っちゃったけど、旅は旅よね。ふたりでアルヴァニスタに泊まれたんだから、よしとしなくちゃ)

「このへんじゃなかったかしら。針葉樹林が見えて……」
ラリーたちが待つ空き家が近づいたころ、ミラルドは山道でクラースの腕を取って言った。都に行く途中でスタンザに出会い、恐ろしい思いをしたということは話してあった。
「でもあそこって本当に変な場所よね。中に入ると暗いのに外から見てもそれがわからないの」
クラースはしばらくあたりを見回していたが、
「おまえって意外と方向音痴なんだな。あの林の脇を通ったなんて、遠回りもいいところだぞ」
と笑う。

「そうなの？　でも、だったら最初から一緒に来て欲しかったわ」
ミラルドが言ったとたん、前方の繁みがガサガサッと音をたてる。
「きゃ……まさかスタンザ……あら」
繁みを分けて現れたのは、ニルの村のあの男たちだった。今日も猟をしていたらしい。
「聞いたぞ聞いたぞ。一緒に来て欲しかったわぁ〜、だと？」
太っているほうの男が、にたあっと笑う。
「な、なによ」
「だんなと可愛い双子が村長の家にいるんだろ？　ダメじゃないか、刺青兄ちゃんと浮気なんかしてちゃ」
「は」
ミラルドは思わずクラースと顔を見合わせてしまった。
「この間からなにか誤解をしていらっしゃるようですけど、わたしたち」
「まあまあまあまあ」
野ウサギを肩に五、六匹担いだ男がミラルドを遮る。
「いいってことよ。俺たち誰にも言いやしねぇって。こう見えても口は鋼のように固くてね」

「そうじゃなくって、あのねぇ……」

放っておけ、とクラースがミラルドにだけ聞こえるようにつぶやいた。

男たちが手を振りながらふたたび繁みの中に消えてしまうと、ミラルドは「んもう」と不満の声を漏らした。

クラースたちを迎えてくれたのは、ラリーとエリーのふたりだった。

「お帰りなさい」

「ただいま、エリー」

ミラルドは少女の頭を撫で、それからふと床に目をやってギョッとなった。

丸まる太った野ウサギが二羽、転がっていたからである。

「ラリー、これって」

「ああ。この間の村人がさっき来て、置いて行ったんだ」

足の速いやつらだなあ、とクラースはウサギの耳をちょっと引っ張ってみながらあきれ顔になる。

「なにか言ってた？」

ラリーは「まあね」と笑いを嚙み殺した。
「君を刺青兄ちゃんに奪われないように気をつけろと、注意された」
「思い込みってすごいものね。あら、ティミーは？」
そう、とミラルドはエリーに頷きながらリビングルームに入った。
「さっきウサギを受け取ってから、二階へ上がっていきましたけど」
「それよりどうだった、アカデミーは。懐かしかったろう」
ラリーがはやる気持ちをおさえるような口調で訊ねる。
「直接図書館へ入ってしまったから、教室やホールへは行かなかったの。それどころじゃなかったし……でもばっちり見つけてきたわ」
「そうか！　で、どういう」
そのとき玄関のドアが微かな音をたてて開閉したが、誰も気づかなかった。
「これなんだが。栞（しおり）がはさんであるところを読んでくれ」
クラースは司書が貸してくれた本をラリーに手渡した。
ラリーはむさぼるようにそれに目を通していたが、やがて深いため息と共に本を閉じた。
「……なるほどな。キーワードはやはり電気だったたか」

「やはり、というと？」
クラースが質問したとき、エリーが五人分のお茶を運んできた。
「私は魔法学には明るくないのだが、琥珀の持つ力の正体について常々疑問に思っていたんだ。それでいろいろ書物をひもといたりしてね、たとえば喘息がおさまったり精神が落ち着いたりといった現象には、微弱電流が関係しているんじゃなかろうかという仮説を立てていた。アレフに捕えられたとき古代松のあたりが明るかったのも、そのせいかもしれないと思っていたんだ」
ラリーは晴れやかな笑顔になると、ミラルドとクラースの肩を交互に叩き、
「やるべきことがわかったということは、目的を半分達成したも同じなのさ。できれば後学（こうがく）のために、契約の儀式を見学したいが……」
と言った。
「ああ、それはかまわない」
と、そのときミラルドが天井を指さして、
クラースが快諾する。
「ねえ、坊ちゃんは寝てるのかしら？　せっかくのお茶が冷めてしまうわ」
とエリーに訊ねた。

「ほんと。ちょっと見てきますね」
エリーは気軽に立ち上がるとリビングを出ていったが、すぐにまっ青な顔をして戻ってきた。
「父さん！　お兄ちゃんが」
「どうした、また発作か⁉」
「ちがうの。いないんです。これが二階の部屋のドアに貼ってありました――」
エリーの手には一枚の便箋が握られていた。
「見せてみろ」
ラリーは便箋をテーブルに置いた。クラースとミラルドも覗き込む。
「『二日以内に精霊と契約すること』。なんだこりゃ」
「ラリー。ニルの村の男たちは、私たちがもうすぐここに戻ると言っていたか」
ああ、とラリーは頷いた。
「戻ったらとっとと君を追い出せと」
「ふむ……で、私たちの話のさわりを聞いた、と」
クラースが考え込む横で、エリーが唇を震わせる。
「……お兄ちゃんは、スタンザをやっつけに行ったのよ」

「えっ」
ミラルドが驚いて少女の横顔に視線を当てた。
「やっつけるって相手はモンスターよ……子供の手におえるわけはないわ」
「殺すのは無理でも、クラースさんが契約の儀式をすませる間、どこかに引きつけておくことくらいはできると思いませんか」
エリーはキッとミラルドを見上げて言った。
ラリーとクラースの目が合う。
「急ごう！　残念だが儀式の見学はできなくなったな。私は息子を捜す。君とミラルドは洞窟へ行って契約をすませてしまってくれ。エリーは残って」
「いやっ」
少女は断固とした口調で叫んだ。
エリーが父親に逆らうのを見るのは初めてだったので、クラースとミラルドは思わず目を丸くした。
「あたしも父さんといっしょに行きます。お兄ちゃんの考えていることは、みんなわかるわ。ミラルドさんとクラースさんが出かけて行ってからお兄ちゃん、ずっと考えごとをしていたの。お兄ちゃんは自分が弱虫じゃないってことを示したいのよ」

「……いいだろう」
ラリーは、娘の肩をそっと抱いてやった。
「さすがは双子だな」
クラースが感心すると、エリーは即座に首を振る。
「違うんです。まわりの人からしょっちゅうそういうふうに言われますけど。たしかに同時に熱を出したりすることはあります。でもあたしに兄の心の中がわかるのは、双子だからじゃありません」
「家族だからか」
「ええ、家族として……愛しているから。クラースさんだってミラルドさんの心の中が、きっとわかりますよね。それと同じです」
「…………」
クラースは絶句してエリーの顔を見つめていた。

山道から針葉樹林の中に一歩分け入ると、とたんに夜がまとわりついてきた。

それでも地下洞窟までの道はなんとか覚えている。ちゃんと辿れそうだ。

少年は鋭い葉先にちくちくと刺されながらも、全身の神経を研ぎすませて林の中を進んで行った。

やがて月明かりに、こんもりとした隆起が浮かぶ。洞窟の入り口だった。

中の様子を窺ってみるが、もの音ひとつしない。

(動き回るよりここで待っているほうが確実だな)

少年——ティミーは岩陰にそっと腰を下ろした。

しばらく待っていると、果たして下草を踏む意志的な足音が近づいてきた。

震える拳をぎゅっと握りしめながら、ティミーは息を吸い込む。

「スタンザ?」

足音が止まる。

「誰だ」

「僕だよ……この間ここで会ったろ?」

こんなに暗いのにモンスターの角がはっきり見えるなんて、と彼は泣きそうになりながら答えた。

「見回りの邪魔をするな。殺されに戻ったのか」

「そうじゃない。伝言があるんだ、頼まれたんだよ――」
スタンザは体をかがめ、訝しげに少年の顔を覗き込んだ。
(なんて怖い目なんだろう。ううん、きっと僕の恐怖がそう見せているだけなんだ)
ティミーが必死で自分にそう言い聞かせていると、ようやくスタンザの薄い唇が開いた。
「頼まれただと……？　誰に」
「ダ、ダオス……」
「！」
ふいに強く肩をつかまれ、ティミーは洞窟の中に引きずり込まれた。
「もう一度言ってみろ。我が主が、お前のような年端もいかぬ子供を相手にするわけがない！」
「だから……」
と、ティミーは懸命に頭を働かせながら答えた。
「ダオスの部下だって言ってたんだってば。アルヴァニスタへ抜ける手前で待ってるから来るように伝えてくれって」
「なんという者だった」

「それは知らない……言わなかったもん」
スタンザはティミーをつかんでいる手にぐっと力を込めた。
「いっ、痛いよっ！　離して」
「いい加減なことを言うな！　私はダオス様の直接の命により、この回廊の通り道を守っているのだ。林の外へ出ることは禁じられているのだぞ」
岩壁に押しつけられたティミーの足に、なにか硬いものが当たる感触があった。ズボンのポケットに入れたままになっていた、あのペン先入りの琥珀だった。
ティミーが、ふっと笑う。
「なにがおかしい」
「いや、真面目なんだなと思って。なにか問題が起きたのかもしれないじゃないか。無視して、あとで叱られても知らないよ。行ってみなくていいの？」
このモンスターは本当になにも知らないんだ、と少年は気の毒になった。
スタンザは洞窟の奥に視線を走らせ、しばし考えていたが、心を決めたようだった。
「よし。行ってみよう。そのかわりお前を連れて行く」
「……そうくると思った」
ティミーはスタンザの手を払った。生まれて初めて触れるモンスターの皮膚は、感触

といいぬくもりといい、意外なほど人間のそれに似ていた。
(驚いた。もっとぞっとするほど冷たいのかと思ってた)
ティミーは「こっちだよ」と言いながら、都とは反対側に歩き出す。
心臓は早鐘のように打ち続けていたし、地に足が着いている感じもしなかったが、ここでやめるわけにはいかない。
振り返ると、長身のモンスターが黙ってあとからついてくるのが見えた。

針葉樹林を少し入ったところで、クラースとミラルドは松明を消した。
ここから洞窟まではなんとか辿りつけそうだし、なによりスタンザに発見されることだけは避けたかったのである。
やがて、月明かりの下にこんもりとした隆起が見えた。
「さて、と。スタンザが中にいなければいいがな」
「アレフの声も聞こえないし、大丈夫なんじゃない？」
「大丈夫、か」
スタンザがいないということは、すでにティミーが危険な目に遭っている可能性が高

いということでもある。が、ふたりともそれを口にするようなことはなかった。
洞窟に入る。
古代松の根元まで進むと、あたりがぼんやり明るくなった。
「アレフ」
クラースが呼びかけると、精霊が宙に現れた。
「アレフ。スタンザが最後にここに来たのは？」
ついさっきです、とアレフは美しい声で答えた。
「よかった。じゃあしばらく時間があるわね」
ミラルドは、話にしか聞いたことのない契約の儀式を間近に見られることを素直に喜んだ。
が、精霊は静かに伝える。
「しばらくというより、当分戻らないかもしれません。アルヴァニスタの近くまで行くと……」
「なんだって!?　くわしく説明してくれ」
クラースが険しい表情で問いかける。
「いえ……声を聞いただけなのですが、以前あなた方と一緒にいた子供が、ここに来た

のです」
精霊は、ティミーがスタンザを連れて行ったらしいことを話して聞かせた。
「すぐに追いかけましょうよ」
ミラルドがせきこんで言ったが、クラースは一歩前に進み出ると、
「アレフ。あらためて契約をお願いしたい。そして私に力を貸してほしいのだ。必要なものは用意してきた」
と、クリスタルアンバーの契約の指輪を地面にそっと置いた。
アレフは指輪に視線を落とし、
「わかりました。これはラリー・オーウェンが見つけたものですね」
と微笑む。
「あの方はどこに？」
「いま話に出た息子を捜しに行ってるわ」
「そうですか」
なんて優しく笑うのかしら、とミラルドは精霊を見上げていたが、ハッとなった。
「ねえ、アレフ。ずいぶんラリーのこと気にするのね。彼、ずいぶんモテるみたいだし、もしかして……好き、だとか？」

「バカなっ！」
ぴしり、とアレフは言い放った。
「精霊が人間に恋をするなど、あり得ないこと」
「そ、そうよね。ごめんなさい」
ミラルドがあわてて謝るのを、クラースが咳払いで遮る。
「くだらない話はそれくらいにして、そろそろ下がってくれ。アレフ、では頼む」
洞窟内に呪文が流れはじめた。ひとさし指と中指をさっと立て、印を結ぶ。
「我、いま、古代松の精霊に願い奉る。指輪の盟約のもと、我に精霊を従わせたまえ！
我が名はクラース・F・レスター………………」
（す、すごい……！）
天井の岩を通して一条の光がまっすぐに差し込んでくるのを、ミラルドは瞬きもせず
に見つめていた。
指輪が光り始めた。
クラースを捉えた光にアレフが寄り添う。と、見る間にその姿は溶け込むように見え
なくなり、クラースの体の中に受け入れられた。
ほうっ、とミラルドが息をつく。

振り返ったクラースは、唇の端をちょっと持ち上げてみせた。
「終わった。早いところラリーと合流しよう」
「ええ」
ミラルドは上気した頬に手を当てながら、
「まだ胸がドキドキしてる。あなたって本当に召喚師だったのね」
と言った。

「まだか」
スタンザのイラついた声を聞くたびに、ティミーは深い山の中で飛び上がった。
「も、もう少し」
時間稼ぎのためにわざと都から離れるように歩き始めたはずだったが、方角などとっくにわからなくなっていた。
（クラースはもう儀式を終えたかな……）
夜の気配が漂い始めている。

恐ろしい後悔に小さな体を押し潰されそうになりながら、暗闇に乗じてなんとか逃れる方法はないかと、ティミーは考え続けた。

クラースとミラルドはいったん空き家に戻り、そこに誰もいないのを確かめると、ふたたび外に出た。
「夜になってしまったわね」
「ああ。ラリーたちがどちらに行ったかわからない以上、ここはまっすぐアルヴァニスタ方面に進むのが正しいんだろうな」
「ええ。精霊はそう聞いたって言ってたものね」
ふたりはとっぷりと暮れた山道を歩き出した。
「松明のおかげで、すっかり腕力がついたわ」
ミラルドが笑う。
クラースはふと、揺れる火影を映すその横顔を見ながら、自分はどこまでミラルドの心がわかっているのだろう、と考えた。

幼なじみという事実に甘えて、理解しようとする努力を怠り続けてきたのではないか？
愛しているから――というエリーの言葉が脳裏に甦る。
クラースはミラルドの手から松明を取ると、彼女が歩きやすいように足もとを照らしてやる。
ミラルドは一瞬驚いた表情になったが、なにも言わなかった。

前方にちろちろと燃える火を見つけたのは、夜半過ぎのことだった。
「焚き火か!?　行ってみよう」
クラースが小走りになる。
果たして、まばらな木立ちの下で火を焚いて休んでいたのはラリーとエリーだった。
「おお、クラースか」
ラリーは眠ってしまったエリーを抱いたまま、片手を差しのべる。
「契約の儀式はすんだのか」

「ああ、無事に。やはりティミーはスタンザを林から引っぱり出したらしいが……その様子じゃまだのようだな」
ラリーは無言で頷き、ため息を漏らす。
「気を落とすなよ。アルヴァニスタ方面に向かったらしいということがわかったんだ」
「ほんとか？　だが、それならこのあたりで会ってもよさそうなものだがな……」
ラリーは、クラースたちに火に当たるようすすめた。
ふたりが適当な場所に腰を降ろすと、彼は枯れ枝をくべながら、
「君たちに、聞いておいてもらいたいことがあるんだ」
と言った。
「もしこのまま、ティミーとスタンザが見つからなかった場合――」
「そんなことないわ！」
ミラルドがむきになる。
「まあまあ、学者の常でね。いつでも仮説は立てておくようにしているんだ」
と、ラリーは微笑んだ。
「その場合――回廊をふさぐ役は私に任せてもらいたい」
「なんだって？」

今度はクラースが身を乗り出す番だった。
ラリーは「しっ」とひとさし指を立て、
「静かに。エリーが目を覚ます。考えたんだよ——私にはもう子供がいる。未来に対しての義務は果たしたと思わないかね」
「それは……」
「人間の生体エネルギーでも、用はなすんだったよな」
「ちょ、ちょっと待ってくれ、ラリー」
クラースは両手でラリーを押し戻すような仕草をして言った。
「あんたが死んだら、妻や子っていうのはどうなっちまうんだ？　それならいっそ私が琥珀に入ったほうが簡単じゃないか。私は天涯孤独で、妻もいない子もいない……」
ミラルドの表情がさっと強張るのを見たラリーがゲンコツを握り、
「彼女のかわりに殴ってやろうか。君たちはこれから結婚して子供を育てて、いろいろ忙しいはずだぞ」
と、クラースを睨みつけた。
「あーあ、もうやめてよ！　どうして男ってこうカッコつけたがりなのかしら」
ミラルドはうんざりして、

「誰が人柱になるかなんて、いま相談してどうするのよ」
と唇を尖らせた。
「すまんすまん。言ってみただけだよ。じゃ、ひとつ気分を変えるか」
ラリーは琥珀の入った布袋からごく小さなものを取り出すと、ポンと焚き火にくべる。
ややあって、強い香りが漂いはじめた。エリーが身じろぎする。
「どうかな？　琥珀は燃やしても香料として使えるんだ」
「いい香り……ちょっともったいないけど」
ミラルドはうっとりと残りの琥珀を手にとって眺めていたが、急に目のことを思い出し、ハッとなった。
（この前、琥珀の中に見えた目……。あのときはただ気持ちが悪かっただけだったけど、あの目……わたしの目が映っていたわけじゃない。どこかで見たことが……）
「ラリー！　ねえ、教えて。あなたの家の中には琥珀があるわよね」
「どうしたんだ、急に。琥珀は、そりゃ置いてあるにはあるが……書斎の棚に少しと、あとは階下……リビングとダイニングにひとつずつ、くらいかな」
ラリーは驚きながらもそう答えた。
「やっぱり。そう、そうなのよ。わかったわ！　クラース、アレフを呼んでちょうだい」

「なんだよいきなり」
クラースも面食らう。
「わかったのよ。あの目……あれはアレフの目だったの。なぜラリーが引き寄せられたかも説明がつくわ。でもそれより、ティミーの居場所がわかるかもしれない。あの子、ペン先が入った琥珀をポケットに持ってたでしょ」
よくわからんなとつぶやきながらも、クラースは立ち上がり、精霊を召喚した。
「出でよ、アレフ！」
精霊が出現すると、感激したラリーが唸る。
「アレフ。ミラルドがなにか話したいらしい。頼む」
「はい、なんなりと」
精霊は優しげにミラルドを見下ろした。
「時間が惜しいから単刀直入に聞くわ。あなた、琥珀を通して外の世界を覗くことができるわよね」
「……え、ええ」
アレフは口ごもりながらもミラルドの言うことを認めた。
「それはいずれお話して……」

「いいのよ。話は、あとあと」
クラースとラリーが、さっぱりわけがわからないという顔を見合わせる。
「ティミーが琥珀を持っているんだけど、それがどこにあるか教えてほしいの」
「かしこまりました。少し、お待ちいただけますか——」
精霊は目を閉じ、精神を集中しているようだった。
ようやく事情が飲み込めたラリーとクラースも、緊張の面持ちでアレフを見上げる。
「……まっ暗、ですね」
ポケットの中じゃな、とクラースは首を振った。
ミラルドもがっかりしてしまう。が、そのときだった。
「あっ、待ってください！　なにかにぶつかりました——地面……」
「琥珀が落ちたのね⁉」
「ええ」
アレフがぽっかりと目を開けたが、焦点はまるで合っていない。夜の闇の向こうを見つめているようだ。
「ティミー・オーウェンが横に見えます。いま、倒れて——」
「なんだって⁉」

ラリーの叫びに、エリーが目を覚ましたようだった。
「大きな手……角？」
「スタンザかっ！」
はい、と精霊は前を向いたまま頷く。
「で、場所はどこなの？　この近くのはずよ」
ミラルドの問いに、アレフは微かに眉を寄せ、首を傾げた。
「いいえ。ここからは遠く離れています。古代松のある、あなたがたが地下洞窟と呼んでいる隆起をはさんでちょうど反対側になります――」
「お兄ちゃん!?」
エリーが跳ね起きた。
「父さん、お兄ちゃんが苦しいって……呼んでる、呼んでるから早くっ!!」
「なんてこった！」
ラリーは頭を抱えこんだ。

第五章

「ダオス様の部下などどこにもいないではないか——仲間の気配があれば、この私が気づかぬはずがない。謀(はか)ったな！」
「うわっ」
スタンザに小突かれて、ティミーは山道に転倒した。
その拍子にポケットから琥珀が転がり出たが、あたりが暗いうえ、それに気づく余裕などない。
「言え！　何の魂胆があって私をこんなところまで連れてきた」
「……魂胆なんかないってば。ほんとに頼まれたんだ。けど、都がどっちの方角なのかわからなくなっちゃったんだよ」
仰向けになったティミーは、モンスターの生暖かい息が顔にかかるのを感じながら訴えた。

「と、とにかく夜が明けるまで待ってくれよ。ね？」
スタンザの顔を押しのけようと出した手が、硬いものに当たる。
(角……！)
逃れられない、と少年は本能的に悟った。そして、そのまま気が遠くなっていった。

意識を戻してくれたのは、樹々の間から洩れ落ちる朝日の眩(まぶ)しさだった。
「ん……」
うっすら目を開け、あたりの様子をそっと窺うと、右手の先に転がっている琥珀が見えた。ティミーは素早くそれをポケットに戻す。
こちらに背を向けて立ち尽くしていたスタンザが、気配に気づいて振り向いた。
「起きたか」
「うん……」
「見ろ。太陽が向こうから昇ったのはなぜだ」
「なぜって、あっちが東だからに決まってるじゃ……」
草の上に起きあがったティミーはハッと口をつぐむ。

「お前はわざとアルヴァニスタと反対方向に来たのだな。私としたことが、油断した。だが、そんなことはもうどうでもいい。さあ、見せてみろ、お前の心の奥底を――」
「…………！」
スタンザに凝視され、ティミーはぴくりとも動けなくなる。恐怖からくる叫びだけが喉(のど)から解放された。
「うわあああああぁぁぁぁぁ〜〜〜、やめて！」
モンスターの両眼が血の色を見せて発光したとき、ティミーの首ががくりと落ちた。
「……かい……ろ、う……」
「なんだと？」
スタンザはカッと目を見開いた。

ラリー、クラース、ミラルド、エリーの四人は、山道を針葉樹林まで戻ろうと必死で歩いていた。
「くそう、間に合ってくれ！」

「アレフ！　ティミーはいまどこだ」
クラースについてくるよう命じられた精霊は、
「わかりません。でも、少しずつ近づいてはいます」
と、宙空から答えた。
途中で昇った太陽はすでに天頂に達している。
「あっ、林！　林が見えるわ！」
エリーが叫んだ。
数時間前にミラルドが見つけた野葡萄を分け合って口に入れたきりだったので、みんなふらふらだったが、針葉樹林が目の前に広がったことで新たな緊張が生まれた。
「これで半分来たってわけね」
ミラルドが言うと、クラースは前方を見つめたまま、
「そうでもないらしいぞ。見ろ」
と、顎をしゃくった。
「あっ」
スタンザだった。
林に入ろうとしたところでクラースたちに気づいたらしい。

まだ相当に離れていたが、ティミーをがっちりと抱えているのがはっきりと見てとれた。
「モンスターめ！　息子を離せっ！」
ラリーが怒鳴るのと同時に、スタンザはすっと林の中に消えてしまう。
「しまった。中に入ったらやつに有利だぞ」
男たちが走り出したのに続きながら、ミラルドはエリーの手をとった。
「ねえ、あのモンスターって明るいところで見るとなんだか貧弱な感じがしなかった？」
「そう言われればそうですね。あまり長い間夜の中にいすぎたせいかも」
と、エリーは答えた。

地下洞窟の古代松の横に仁王立ちになり、スタンザは待ちうけていた。
「やっと来たか。こんな子供を使うとはな」
四人と対峙したスタンザは憎しみのこもった口調でそう言うと、足もとにぐったりと横たわっているティミーの脇腹をごついブーツの先で突ついた。

「お兄ちゃんっ」
「やめろ！　ティミーをこっちへ寄こせ」
「そうはいかない」
モンスターはラリーを睨みつけると、ティミーをまたいで前へ出た。
「聞いたぞ、この子供にすべてな。回廊の破れ目をふさぐつもりだと？　私をここから引き離しておいて、その間に何をしたのだ」
さあな、とクラースが薄笑いを浮かべる。
「べつに何をしたってほどのことはない。変わったできごとといえば、久しぶりにダオスが通ったことくらいか」
「ダっ、ダオス様がっ⁉」
スタンザの声がひっくり返る。
どうやらダオスのことはティミーに聞かなかったらしいなと思いながら、クラースは続けた。
「ああ。お前がいないといってひどく立腹していたっけ。なあ？」
突然水を向けられたミラルドは、あわててこくこくと頷いた。
「く………そんな……バカな……」

がっくりと膝を折ったモンスターの隙をつき、ラリーが息子を奪い返す。
「ティミー、しっかりしろ。父さんだぞ。おいっ」
何度か頬を叩きつづけると、やがてティミーの目が開いた。
「あ……僕……」
「よかった、気がついたか！」
少年が、父親と妹に抱きしめられるのを横目に捉えたクラースは、
「スタンザ、いまのはウソだ」
と、あっさり告げる。
「！」
「アレフ！　スタンザは間近だが大丈夫か？」
はい、という澄んだ声だけが天井付近から聞こえた。
「というわけだ。精霊は私と契約した」
スタンザはギリギリと歯噛みしていたが、やがてゆらりと立ち上がる。
「貴様……私はかつて主と共に、はるかデリス・カーラーンよりこの星にやって来た者だぞ。私のダオス様への忠誠心を玩ぶとは、許せんっ！」
ドンッ！

クラースのすぐ横手で火柱があがる。
「まあ待て。自分で回廊を破壊してどうする。この先はまじめに話すから、よく聞くんだ」
「…………」
「いいか。ここはこの星の時代で、アセリア暦四一九九年になる。百五〇年余り先の未来で、私は仲間と共にダオス軍と戦い——そして滅ぼした。わかるか？　もうダオスは死んだんだ。ここで待っていても決してやって来ることはない」
スタンザの目は驚愕に見開かれ、唇はこわばった。
「……さか、まさか……何も聞かされていない……」
「あのときダオス軍にそんな余裕はなかったさ。気の毒だが、お前の存在を覚えていた者がいたとも思えん。とにかく終わったんだ。だから私たちは回廊を元どおりにする。この星に流れるすべての時間を正常に戻すためにな」
スタンザは数歩よろけると岩壁に手をつき、肩を激しく上下させた。
「そうやって……お前たちは……また私を騙す気なんだろう？　なにも望まず、家族も忘れ、ただ主に仕えてきたのに！　お前たちこそ死ねばいい!!」
残忍な光が戻った目で振り返ると、スタンザはこの星の人間たち五人を順番に睨みつ

ける。
クラースは口の中で呪文を唱え始める。
「これ以上ノームはダメよ、クラース」
ミラルドが鋭く言うと、召喚師はわかっているというふうに軽く頷きながら、印を結んだ。
「出でよ、ウンディーネ！」
青い髪の精霊が現れた。洞窟内の温度がにわかに下がったようだった。
「頼んだぞ」
ウンディーネは、
「ここは案外乾いておるの」
とつぶやき、片手を上げた。
すると次の瞬間、その手に見事な水剣が握られていた。
「きゃー、水の精霊よ、水の精霊よっ」
思わず声をあげたミラルドは、ティミーに「しっ」と叱られて口をつぐんだ。
「な、なんだこの女はっ」
スタンザが精霊を見上げて火柱を放つ。

ジュウッ！
が、水剣に払われ、火はあっという間に消滅した。
「むうっ」
スタンザはふたたびウンディーネを攻撃しようとしたが、じりじりと洞窟の奥へと追いつめられた。
「ウンディーネ！　最後に思いっきりやってくれ」
「あいわかった」
精霊がモンスターの上から大量の水をぶちまける。
「ぐわっ、や、やめ……！」
水の勢いに、スタンザは地面に叩き付けられた。
「出でよ！　ヴォルトっ！」
「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊！」
ジリジリという耳障りな音を発しながら、黒っぽい球体が発現した。
「みんな、できるだけ離れていてくれ」
クラースが半身だけ振り返ってラリーたちに避難するよう促した。
「＊＊＊！　＊＊？」

「ああ、いいぞ」
ヴォルトはすーっと降りてくると、スタンザを濡らしている水の際をちょんちょんと突つくような仕草をした。
ピリピリと音がして、水面を小さな稲妻が走る。それはたちまちスタンザを包み込み、悲鳴を上げさせた。
「うっ⁉　ぐわあああああぁぁぁぁぁ――――っ‼」
ヴォルトはふたたび浮かび上がると、今度は上からモンスターを直撃する。
ドオォォォーンッという轟音と共に、雷が落ちた。
ドオオンッ！　ドンッ‼
二度、三度と落雷は続く。
「ぎゃああっ！　や、やめてくれっ、やめさせてくれっ‼」
真昼のように照らされた洞窟の中で、恐怖と苦痛が剝き出しになったモンスターの顔は正視に耐えないほどに歪みきり、興味津々で見ていたはずのミラルドとラリーがほとんど同時に目をそらしたほどだった。
「ヴォルト、もういい」
クラースがちょっと手を上げて合図すると、雷の精霊はジリジリいいながら姿を消し

た。
　スタンザは片肘をついてやっとのことで体を支えると、クラースを睨みつけた。
「この回廊を守ることは、命より重い任務なのだぞ。そう簡単にあきらめてたまるか」
　クラースは、しばしの間スタンザを見下ろしていたが、
「仕方がないな」
　と静かに言った。
「ならば、とどめを刺す」
　呪文を唱え、ゆっくりと印を結んだとき、モンスターの目にわずかな動揺が走る。
　そして、震えを含んだ声で、
「待て！　待ってくれ」
　と懇願した。
「ふっ。ダオスの最期はもっと潔かったがな……この期に及んで命乞いか」
「そうではない！　私は」
　スタンザは首を振り、唇を震わせた。
「私には……何度聞かされても、やはり信じられない。いつのころからか……破れ目から波動が感じられなくなったのは事実だ。しかし、もしかしたら生き延びて、デリス・

カーラーンにお戻りになったやもしれぬ。いや、きっとそうなのだ。ダオス様はいつかきっと私を迎えに来て、この回廊を守り続けたことをほめてくださるはず……。だが、いまここで死んだら私の肉体はたちまち滅び去るだろう」

「なにが言いたいんだ？」

ラリーが近づいてきて訊ねた。

「願わくば……このまま眠らせてはもらえまいか」

「なんだって？」

「……破れ目は琥珀でふさぐのだそうだな。この場所で、琥珀の中に眠っていれば、たとえどんなに時間（とき）がたってしまってもダオス様が私を見落とすことはないだろう？」

モンスターはラリーではなく、自分自身に言い聞かせるかのように、闇を見つめて一心に話し続けていた。

「どうする、クラース？」

「眠るも死ぬも同じ事だと思うがね」

「男のロマンってやつか。私たちも一度は琥珀入りを考えたのだから、こいつのことを笑うわけにはいくまい」

「だな」

クラースはラリーと頷き合い、声を張った。
「アレフ！」
精霊が現れる。
「聞いていたな。完全にふさいで、回廊を独立させてくれ」
「はい、ご主人様」
古代松が発光する。
スタンザのまわりをヒタヒタと樹脂が浸し始めた。
「さあ、私たちは外へ出るとしよう」
クラースが皆を促したそのとき。
「召喚師――」
スタンザが呼びとめた。
「なんだ」
「いや、ただ礼を言いたかっただけだ」
「お前なあ」
クラースはさすがに呆れてしまった。
「こんなときにまでそう礼儀正しくしないでくれ。その律義さが命とりになったんじゃ

ないか」
「与えられた使命をまっとうすることこそが、戦士としての誇りだ」
「そうか……そうだな」
クラースの胸が熱くなる。
「立派だよ、お前」
「…………」
モンスターはもう返事をしなかった。
(ダオスよ)
クラースは心の中で呼びかけた。
(お前を倒しておいてこんなことを言うのもなんだが……できることなら一度でいい。こいつの夢の中へ会いに来てやってくれよ)
クラースの視線の先では、モンスターがゆっくりと目を閉じ、眠りにつこうとしている。
先ほどまでは青ざめ、震えの止まらなかった唇には、微笑みさえ浮かんでいた。

針葉樹林を抜け、振り返った五人は、林全体が明るく輝いているのを見た。
それはすべての針葉樹の樹脂から生み出される、真新しい琥珀の輝きに違いなかった。
すでに傾いてはいるものの、陽はまだ高い。
「うわー、昼間なのにこんなに明るいなんて！」
ティミーが目を細めながら感嘆の声をあげる。
ラリーは娘を抱き、ミラルドはクラースに寄り添って林を見守った。
やがて光が吸い込まれるように消えてなくなると、樹々がざわざわと揺れた。
「行ってみよう」
まるで寝返りを打つように揺れる林の中に、エリーを抱いたままのラリーが飛び込んだ。
「おお、夜じゃなくなってるぞ！」
クラースたちもあとにつづく。
「本当だわ。ちゃんとお陽さまが出ているし……それに」
「ああ。時間の歪みによる隆起がなくなっている」
ミラルドとクラースの足は自然、地下洞窟があった場所へと向かう。

「埋まってるわ……」
洞窟の入り口は溶かし固めたようになって、平らな大地の一部と化していた。
そして、巨大な古代松が涼しげに地上に露出している。
「どうやらふさがったようだな」
ラリーが背後からクラースの肩を叩いて笑った。
「私たちも律義にいったほうがいいのかな。精霊に礼を言おうか」
クラースも笑って、アレフを呼び出した。
「ご苦労だったな、アレフ」
「いえ……」
松の幹が大きく枝分かれしているあたりに浮かんで、精霊は微笑んだ。
「あのう、ご主人様。お話ししたいことがあるのですが」
「なんだ?」
精霊はすーっと降りてくると、ラリーにちらりと視線を走らせ、
「スタンザはとても穏やかな顔をしておりました。あの異星からやって来たモンスターの名誉のために申し上げるのですが……」
と前置きした。

「私がこの方を引き寄せたのは、操られていたせいばかりではないのです」
「なんだって⁉　どういうことだ」
精霊は眉を寄せたラリーのほうへ体を向け、
「ご存知のように、私は琥珀を通して外の世界を見ることができます。ですから琥珀を持つ人間が多いのは知っていますが……私の核であるクリスタルアンバーをあなたが見つけたときから、私はあなたに特に興味を持つようになりました」
と言った。
「あなたの名前、あなたの家族……心をひかれました。数億年もの間、たったひとりで琥珀を作ってきた私には、ひとりではない生活を送る人間というものの存在がとても新鮮だったのです。むろん、本来ならただそれだけのこと。けれどスタンザに狂わされ、少しずつ壊れてゆく中で、心の奥底に沈んでいたはずの人間のことが、あるとき一気に噴き出してしまったようで……」
「かわいそうに……淋しかったのね」
エリーがつぶやいた。
「気がつくと、時間の破れ目を使ってラリー・オーウェンという人間を引き寄せていたのです……。どうか……許してください」

アレフは静かに目を伏せた。
ラリーは精霊をじっと見つめていたが、
「許すも許さないも、もうすんだことだ。それどころか、琥珀商冥利に尽きるよ」
と微笑んだ。
「もう気にするな、アレフ。またなにかあったら助けてくれ」
クラースが言うと、精霊はゆっくりと姿を消した。
「なによー。心ひかれるだなんて、やっぱり恋じゃないの」
ミラルドは納得がいかない様子だったが、
「ま、いいか。タキアのことを考えると、そのほうが穏やかだしね」
とつぶやいた。

空き家に戻ると、玄関先に干し肉が置かれていた。その横に野の花のブーケを見つけると、エリーは歓声をあげた。
「きれい！　またあのおじさんたちが来てくれたのね」

「土地も元どおりになったし、村長はまたこの家を使うようになるだろうな」
ラリーはまだ新しい壁を撫でながら、
「ところで、私たちもちゃんと家に帰れるといいんだが」
と言った。ティミーがぱっと顔を輝かせる。
「まかせてよ！　時間の剣があるから大丈夫さ。ここに来るときだって、僕がちゃんと操作したんだ」
「ちゃんと？　ドロボー同然に勝手に使ったのは誰だよ」
クラースは苦い表情で少年を睨んだが、すぐに時間の剣を渡してやる。
「帰りも頼んだぞ」
「うんっ！」
「言っておくが、これが最後だからな」
わかってるよ、とティミーはうれしそうに剣を押しいただいた。
「ちょっと待って」
エリーがぱたぱたと台所に駆け込もうとする。
「早くしろよ」
ティミーが嫌な顔をしたが、エリーはすまして答えた。

「なに言ってるの。お世話になったんだから、ちゃんと片づけておかなくっちゃ。そうでしょ？」
「あ、ああ」
（その調子よ、エリー）
ミラルドは密かに笑みを漏らす。
ほどなく戻ってきた少女の手には、先ほどのブーケがしっかりと握られていた。
「じゃあ行くぞ！　みんな集まって」
ティミーの腕が高く掲げられる。
「時間の剣よ、アセリア暦四二〇二年へ！」
刃先から、震えるような光が発せられたが、すぐに見えなくなってしまう。
「……またか。これ、出が悪いんじゃないの？」
「バカなことを言うな、もっと真剣に祈るんだ」
クラースは少年の肩に手を置いた。
「じゃあ、もう一度。時間の剣よ——母さんの待つ僕たちの時代へ‼」
まばゆい光がリビングルームいっぱいに広がる。
輝きは五人を包み込み、消えた。

「うわー、やったぁ、うちだ、うちだっ!!」
「母さん、母さん！」
到着した場所がオーウェン家の前だったので、双子たちはうれしさのあまり抱き合って叫んだ。
ラリーだけはまた呆然としている様子だったが、玄関のドアが開くのを見て、ハッと我に返った。
「なんの騒ぎかと思ったら……あなたたち!!」
タキアが転がるように走り出てくると、まだぴょんぴょん飛び跳ねている双子を押さえつけるように抱きしめる。
「よくまあみんな無事で……ラリー、あなたも！　どんなに心配したことか。食事も喉を通らないし、なんにも手につかなかったんだから！」
ラリーはさらにタキアを抱き、「うんうん」と頷いた。
「ぐるぐる巻きになって泣いてるわ、あの四人」

自分も目頭(めがしら)を押さえながら、ミラルドが笑う。
「いいなあ。なんだかうらやましいわ」
「巻くのが？」
クラースは思いきり後ろ頭を引っぱたかれた。

ところが、ミラルドの感激はオーウェン家の居間に入ったとたんにどこかへはじけ飛んだ。
「えっ？　これ……どうしたの？」
タキアはエリーにプレゼントされたブーケを両手で持ってすっかり上機嫌だったが、ミラルドの問いに一瞬ギクリとなった。
「ああ、それ、は」
ソファの背に、ぐちゃぐちゃに丸まったまま引っかかっている青い布のかたまり……。
裏返しになってはいるが、持ち主が見間違えるはずはなかった。
「わたしが持ってきたドレスよね？」
「片づけておこうと思って、つい忘れちゃった。ごめんね」

「そういう問題じゃないでしょうっ！」
ミラルドは叫んだ。
「タキア、あなたセレモニーに出たのね⁉　しかも無断でひとのドレスを着てっ！」
へへへ、とタキアが舌を出す。
「なーにがどんなに心配したことか、よ。何にも手につかない人がなんでわざわざアカデミーに出かけて行くの。だいたい招待状もないのに――」
「あら、それは問題なかったわ。あなたの荷物の中から探してちゃんと持って行ったから」
「なんですってぇ⁉　ラリーのがあったでしょうに！」
顔を洗いに行っていたラリーと子供たちが、何事かと戻ってきた。
ラリーはリビングの隅にいたクラースに視線で問いかけたが、彼は微かに首を振るばかりだった。
「落ち着いてよ、ミラルド」
タキアはソファに腰かけながら、深呼吸をしてみせる。
「いくらサイズがぴったりだったからって、色もデザインも好みだったからって、黙って借りたのは悪かったわ。でも、断ろうにもあなたたちは海岸から消えてしまったっき

り戻ってこないんですもの」
ミラルドも向かい側にドスンと座る。
「すごい理屈ね」
「……誤解しないで。私はちゃんとミラルドの代理だといって参加したのよ。別にあなたになりすましたわけじゃ」
「もういいわ」
ミラルドはひらひらと手を振ってみせると、
「あーあ、セレモニー終わっちゃったんだー」
と、天井を向いて言った。
ラリーはクラースにそっと近寄ると、
「彼女にとって、この数日間の大変な出来事より、一枚のドレスのほうが問題だったたってことか？」
と囁（ささや）いた。
「そうでもないだろうが」
クラースは苦笑する。
「しかし、まったくふたりとも子供みたいだな」

「女ってことだよ」
そのとき、タキアがふっと顔をあげた。
「あ。セレモニーで思い出した。ラリー!」
「な、なんだ?」
「こっちへ来て」
タキアは急に怖い顔なると、
「あなた、教授時代に浮気してたでしょ」
と、きり込んだ。
「げっ!? な、なにをいきなり」
双子は驚いて顔を見合わせる。
「セレモニーのあとのパーティーのときに、女性に声をかけられたのよ。私がオーウェン教授のれっきとした妻だということを確認したうえで、彼女は言ったわ。大事なものを返してほしいって」
「………」
ラリーはぽかんと口を開けた。
「大事なものってなんなのか聞いたら、こんな公の席で言ったら私が処罰されます、で

すって。三年前からずっとだなんて、琥珀採り行くと言っては会ってたんじゃあ……職員なんですってね、あの女っ」
「おい、私にはさっぱりわからないぞ」
ラリーが困惑しきった顔になったとき、クラースが口を開いた。
「それ、どんな女だった？」
「どんなって……キツい感じの、こう、髪をひっつめにした……」
ぷっ。
クラースとミラルドは同時に吹き出してしまう。
「なによ、ひとの不幸を笑う気？」
「ちがうちがう。大事なものって、これよ」
ミラルドはクラースが持っていた本をタキアに手渡した。
ふたりで図書館から借りた、あの持ち出し禁止の本である。
「そういうことか。図書館司書の女史と私が浮気……はっはっはっ、こいつはいい！」
ラリーが大笑いしだすと、タキアは涙ぐんだ。
「なによ、こんな本。私、もうびっくりして、心臓が止まるかと思ったのよ。せっかくおいしいお料理をいただいてたのに落としちゃうし」

「ええっ」
ミラルドの顔色が変わる。
「立食だもの、お皿ごとよ。しかもワインも一緒に」
「うそっ」
裏返しのままにしてあったドレスをひっくり返してみると、果たしてスカートの部分に大きなシミができていた。
「ちょっとタキア、どうしてそのままにしておいたのよ。すぐに洗わなきゃダメじゃない」
「だから、それどころじゃなかったんだってばっ」
「食事も喉を通らないって言ってたくせに。うそつき」
「意地悪ね、ミラルドって」
ふたたび言い合いを始めたふたりにつかつかと近づいたのは、エリーだった。
「いい加減にしてください」
ふたりはハッと口をつぐむ。
「母さん。いま一番先にしなければならないことは、なんでしょう」
「……さあなにかしら」

「……シミ抜きです」
少女は手に持った濡れタオルで、ドレスの生地をトントンと器用に叩き始めた。
それから兄を振り返ると、
「ひまならお茶をいれて。手が離せないから」
と言った。
ティミーは一瞬口をもごもごさせかけたが、「わかった」と台所へ入ってゆく。
「……なんだか、ふたりともちょっと感じが変わったような気がするわね……?」
タキアが首を傾げるのに、ミラルドは、
「成長したのよ」
とすまして答えた。

「絶対おかしいよ」
シュンシュンと音をたて始めたヤカンを見守りながら、ティミーは唇を尖らせた。
ラリーとクラースは人数分のカップを用意している。
けっきょく男三人で台所にこもることになってしまったのだ。

「久しぶりに家族全員が揃ったんだよ？　ふつう、こういう場面ではつもる話とかしてさ、盛り上がるものだよねぇ。なのになんでシミ抜きなんか」
「いいんだよ」
ラリーは慰めるように言った。
「ああやってみんな、日常を取り戻そうとしているのさ」
「しかし考えてみれば――」
とクラースが口を開いた。
「スタンザってのもかわいそうなやつだったな」
「まったくだ」
ラリーはため息をついた。
クラースは腕組みをして、リビングの様子を眺めた。そして、飾り棚のいちばん上に大ぶりの、美しく磨きあげられた琥珀が置いてあるのを見つけた。
(アレフはあそこからもこの家族を見ていたんだ……)
これまで、精霊の心についてあらためて考えてみるようなことはなかったな、とクラースは思う。
契約するだけで精一杯だったからだが、精霊ひとりひとりにも感情があるのは当然の

ことなのだ。

(召喚師としては、そのへんも今後の研究課題にする必要があるだろうな)

「とれた!　完ペキっ!!」

クラースの視線の先で、タオルを使っていたミラルドが明るい笑い声をあげた。

タキアとはもうすっかり仲直りしてしまったようである。

もし自分に子孫ができたら、とクラースは思った。

その子は未来でクレスたちに出会うことになるのだろうか?

「世界はそういう風にできているんだろうな、たぶん」

お茶のいい香りが漂い始めた。

さらさらと水の流れる音がする。

古代松の樹液の巡り——。

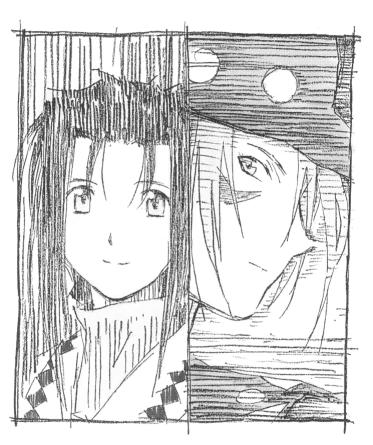
地中深く、その根元で眠る男を、若い琥珀は包み続けていた。
まだようやく形が整ったばかりだが、これから気の遠くなるような歳月をかけて、ゆっくりと熟成されてゆくだろう。
男は天に向かって両腕を突き出し、なにかをつかもうとするかのように指を曲げている。
誰かの迎えに、応えているようでもあるし、星を抱こうとしているのかもしれなかった。
男の最期の瞬間を絡めとった古代松は、ひときわ高く空に伸び上がり、枝を張りめぐらせていた。まるで目印のように――。

エピローグ

時間の剣を封印する旅が、いまようやく始まろうとしているのだった。
ミラルドは、さっき焼き上げたばかりのチェリーパイの包みを手渡しながら微笑んだ。
「あとのことは心配しないで」
クラースはドアを開け、ミラルドを振り返った。
「それじゃあ行ってくる」

あれからオーウェン家を辞したふたりは、ユークリッドの村に戻る前にもう一度王立アカデミーへ足を運んだ。
図書館であの司書に本を返したあと――「あなたがたがずっと持っていたんじゃないんですか?」としつこく聞かれたので、ラリーのためにも罪を認めることにした――、

この間は回れなかった懐かしい構内を歩いてみた。
セレモニーのなごりはもうほとんど残っていなかったし、遠方からやってきていたはずの友人たちもアルヴァニスタを発ってしまったあとだったが、ミラルドはクラースと一緒だというだけでじゅうぶん満足だった。
「タイムスリップを二度も体験してる気分だわ」
と言うと、クラースは、
「同感だね。しかもこっちのほうがリアリティがあるときている」
と笑った。

「なるべく早く戻る。戻ったらその、いろいろ……話そう」
「いろいろって？」
クラースについて外へ出ながら、ミラルドは訊ねる。
暖かな陽射しがふたりに降り注いだ。
「いろいろはいろいろさ」

怒ったような口調で背を向けてしまう。
「たとえば？」
「……未来について、とか」
「え、聞こえないわ」
クラースはぴたりと足を止めると、
「うるさい。出がけにごちゃごちゃ言うな」
と、振り返った。
「おまえは元気で私を待っていてくれればいいんだっ！」
「なにを怒ってるのよ」
ミラルドはくすくすと笑い出してしまう。
「行ってらっしゃい」
クラースの姿が小さくなって消えてしまうと、
「まったくいつまでも素直じゃないんだから」
とため息をつき、授業の用意をするために家に入った。

「先生！　おぶさたでしたっ」
「ごぶさた、でしょ？」
ミラルドは、読み書きを習いにきた子供たちを大部屋に招き入れた。
「ねえ、さっきクラースさんに会ったよ。ずんずん歩いてた。またどっか行っちゃったの？」
「そうなのよ」
「こまったもんだね……あっ」
ミラルドの机の上に飾られている石を見つけた少年が、珍しそうに覗き込む。
ラリーに貰った琥珀だった。
「飴の中に蟻の家族が入ってる！」
「うそっ」
騒ぎだした子供たちを席につかせながら、
「はいはい、勉強のあとでみんなに見せてあげますからね。先生の留守中、ちゃんと自習してた？」
と、教師の顔になって訊ねる。
とたんにシーンとなった子供たちに向かって、彼女は明るい声を張った。

「じゃあこの間の復習からね――」

開け放した窓を抜けて通ってゆく風が、ミラルドの声を運んでゆく。

それは樹々の梢（こずえ）を渡り、木の葉の繁る枝を揺らし、やがてまっすぐ歩きつづけるクラースの髪を優しく撫でて通り過ぎた。

『テイルズ　オブ　ファンタジア　琥珀の回廊』完

あとがき

みなさん、こんにちは～！
あっという間に季節が変わってしまいましたが、今回はお約束（？）のクラースのお話です。
クラースはクレスたちの仲間うちではいちばん年上なので、みなさんもおとなのイメージが強いんじゃないでしょうか？
私もはじめは渋いラブストーリーを、なんて思っていたんですが、書いているうちに〝男の強がり〟みたいなシーンがどんどん増えてしまって。
逆にミラルドはゲーム中ではけっこうしっかり者に描かれていますが、この本の中では服に執着してみたり旅に連れて行けとクラースに迫ったり、子供っぽい部分がずいぶん出てきます。
けっきょく人間て年齢じゃないのよね、と思う今日このごろだったりするのでした。
実際自分がクラースやミラルドくらいのときにどうだったかを考えると、ほんとに子

供だったと思うし……（今でもまっとうな大人かどうかは非常に怪しい）。
ところで、クラースを書こうと決めたとき、当初は時間の剣を封印するまでのストーリーを考えていたのですが、とてもそこまで入らなくなってしまって。
ラストシーンから先、封印の旅がちゃんと進んでいくのかどうかちょっと心配ですね。なによりも無事に帰ったとき、どんな男の決断をミラルドに告げるのやら。
ゲーム中で仲間と最後に別れるとき、「自分は人間だから二度とクレスたちに会えないだろう」という意味のことを言うところがありますが、今回の旅で少し未来に興味を持ったようですから、きっとミラルドの希望通りに展開してゆくのでしょう。そうすればクラースの子孫はクレスやミント、チェスターにも会えるかもしれないしね。
「昔、まだ若かった君のひいひいひいお爺ちゃんと一緒に旅をしたんだよ」なんてクレスに聞かされたら、その子はびっくりするだろうなぁ。でもその子もしっかり刺青してたりしてね。
この『琥珀の回廊』は「テイルズオブファンタジア」の三冊目の外伝にあたるのですが、『真紅の瞳』や『紺碧の絆』と違うのは、ゲームより後の時間のお話だということ。
クラースとミラルドの関係と、時間の剣の封印についてはずーっと気がかりだったの

で、書くことができてよかった〜と思っています。
クレスとミント、アーチェとチェスターはどうなったの？　というお手紙もたくさんいただいていますので、それもチャンスがあればもちろん書いてみたいです。
長いなが〜い時間の流れの中のどの一瞬を切り取るかで、お話は無数にできちゃいますからねえ。正直、書くのは大変だけど、ほんとに楽しいことです。

お手紙といえば。前回のあとがきで「かえるを飼ってる」と書いたら、かえるイラストをたくさんいただきました。
クレスたちのイラストとならんで、とてもうれしかったです。どうもありがとう！
その後、うちのかえるがどうなったかというと、あのとき三匹だったのが今じゃヒトケタ増えて三十匹です。げげー、自分で書いてても自分が怖い。
あれから「あのへんで見たよ、かえる」「あそこに行けばうじゃうじゃいるらしいよ」という情報を聞いては出かけて行って連れ帰ってきたり、ショップで見て衝動買いしたりで……。なんか大変なことになってます。
私は東京の街なかに住んでいるので、とてもじゃありませんが三十匹分の虫を捕まえるなんてことはできません。

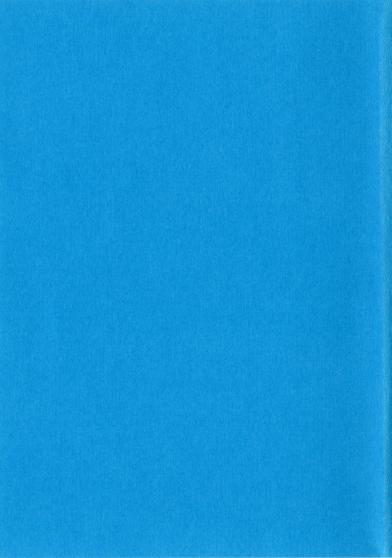
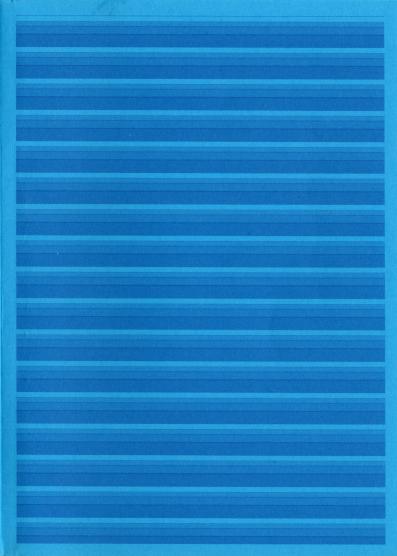
でもね、最近はコオロギのブリーダーさんがあちこちにいて、養殖したのを宅急便で送ってくれるので冬でもごはんの心配はいらないんですよ。いい時代です。困るのは箱の中で鳴きながら配達されてくるので、ちょっと恥ずかしいってことくらいかな。

当時メダカを食べていた五百円玉サイズのエルフの血を引く（?）かえるは、小ぶりのおにぎりくらいの大きさに成長しました。優秀優秀。

これからはあとがきはかえる日記にしちゃおうかな、というのはウソです。それとも読んでくれる人、いますか?

ではまたお会いしましょうっ。

矢島さら

一九九九年九月

矢島さらの著作リスト

テイルズ オブ デスティニー
運命(とき)をつぐもの 上 下

テイルズ オブ デスティニー
青の記憶

テイルズ オブ ファンタジア
はるかなる時空(とき) 上 下

テイルズ オブ ファンタジア
真紅の瞳

テイルズ オブ ファンタジア
紺碧の絆

テイルズ オブ ファンタジア
琥珀の回廊

ISBN4-7577-0118-7

C0193 ¥640E

定価 本体640円 +税

発行○エンターブレイン

ダオスを倒し、クレスたちと別れてユークリッドの村に戻ったクラースは、ミラルドと再会。クレスと交した「時間の剣を封印する」との約束を気にしつつも、ミラルドと二人で平穏な暮らしを楽しんでいた……しかし、アセリア暦4202年のある日。いつものように、子供たちに読み書きを教えているミラルドのところへ、懐かしくも思いがけない人物が訪ねてきた。